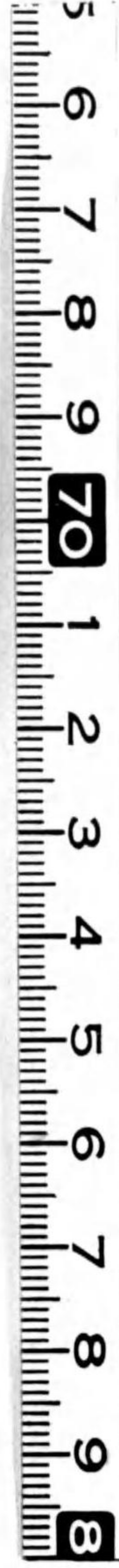


反逆情史

號別特題問

特 501

476



始



函

安 23

號

永久保存

— 馬場恒吾 —

我々が組織してゐる政治研究會で

は、政治を科學的に研究するのみならず、無産階級を統合した所謂無産

政黨組織の準備をしてゐたのであるが、多年の懸案と爲つてゐた普通選

の國民化即ち民衆化の舉も議會を通過して、從來の三百萬

の有権者が一躍一千萬を超ゆるに至り、而も其新有権者の多数は無産者

に屬する民衆である關係から既成政

黨も俄に社會政策的な新政策を綱領の中に加へんとして居るが之は外面を

白く塗りたてた墓の如きものであつて既成政黨の行ふ實際政治には何等

の變化はないものとしが考へられな

い。

產物は併し一千萬人の

收穫がある。此の戰爭

の機械化即ち工業化

の國民化即ち民衆化の

過去の戰爭に於ては唯

て戰勢に狩り出された

労働者は今度の戰爭に

赤戰爭の重要因子たる

ると共に、國家の名の

手先となり足臺となり

脚

下

名

る、いつも同じ雜

言、拾錢だか月極の讀

一日迄だから、何で

己の階級の國家主義(資本

の操らるゝ)に對する離

數の吾々を國民の國家に對する

が、り受くる恩恵に正比す

の自然であるならば、

で、黨を被むること最も薄

は、出來る。自ら殺して自

感に於て何であらんと

ぬる無産階級の共通心理で

— 水野公徳 —

— 大山都夫 —

君は、

吾れも語らず本連の

ホロくと散る

夕べ悲しも。

相見ては

深く黙して語らざる

君が瞳の

うら淋しけれ。

もの思ふ

苦しきしがと胸に秘め

初夏の夕べ

一人おゆる。

— トモツグ —

問題特別號

「國を人ひれもす夜た」おびや、は貴族院議員福原俊丸男の頭である。この歌を讀む時に、吾々は、全く吾々の想像もつかない奇異な世界のあることを知るのである。

彼等の眼には、民衆は大きな口をわいて、今にも飛びかちらうとする妖怪——赤色の妖怪——の姿に見え

られた。現代の清盛は赤い調度に飾り、清盛は白い調度に飾り、

己の咽喉筋に飛びかちらうとする無数の鋼鐵と見える世界のあることは、吾々には思ひも寄らぬことではあるが、世の中には、吾々の思ひも寄らぬ事實が少くない。歌は真情の流露であるといふ。言葉を操へて云へば、

「ひれもす夜た」斯うな脅迫感のことに震えおのいて生活してゐる人々の呻吟であり、民衆を敵として恐れる人の偽らざる告白であるといふ一點に於いても、たしかに名

吟の性質を備へたものである。

日本の社會には、民衆に對して、これまでに恐怖を抱いてゐる一群の人々がある。多くの人々に取つては、これは恐らく、信んぜんとして信ずべからざることであるに相違はな

い。けれども同時にそれは、信ぜざらんとしても信ぜざるを得ざる事實であつて、民衆に對するこれに均し

い恐怖は、今度の普選案の成行きに勢力に對して「ひれもす夜た」を述べられてゐる。

今度の普選案は固より理想的な普選案でない。將來候補條件、年齢制限、人參政權其他種々の點に於て改正されるであらう。併し已に千二百萬人の選權を有したしめる事に依つて、

日本の成年男子の殆んど全部は參政權を握つてゐる。其點に於ては百萬長者も其門番も同じ權利を有つに至つた。此權利を適當に行使さすれば、百萬長者と其門番が同一の政治的權力を有するが故に、富豪專制の

は「ひれもす夜た」斯うな脅迫感のことに震えおのいて生活してゐる人々の呻吟であり、民衆を敵として恐れる人の偽らざる告白であるといふ一點に於いても、たしかに名

足らなければ、充分に其遺員の効果を擧げる事が出来る。英米の如き國に於ても人民は如何に有効に其選舉權を使用せんかと今尙練習して居る

と見てよい。政治的には労働者も資本家と同等である。何故社會的にも

経済的にも同等でないか。これが労働者の胸に蟻る疑問である。此疑問を解決せんとするものが、今日の政治問題の中心となつてゐる。だから政府論家は政治時代は去つて經濟時代が來たと云ふほゞ、經濟問題以外

に於ても人民は如何に有効に其選舉權を使用せんかと今尙練習して居る

と見てよい。政治的には労働者も資本家と同等である。何故社會的にも

経済的にも同等でないか。これが労働者の胸に蟻る疑問である。此疑問を解決せんとするものが、今日の政治問題の中心となつてゐる。だから政府論家は政治時代は去つて經濟時代が來たと云ふほゞ、經濟問題以外

に於ても人民は如何に有効に其選舉權を使用せんかと今尙練習して居る

と見てよい。政治的には労働者も資本家と同等である。何故社會的にも

歐洲戰爭の產物は併し一千萬人の墓とタンクばかりではなかつた。尙ほ他に大なる收穫がある。此の戰爭

は物理的には戰爭の機械化即ち工業化

的に向つては戰爭の國民化即ち民衆化の實を示した。過去の戰爭に於ては唯

一の埋草として戰場に狩り出された労働者の胸に蟻る疑問である。此疑問を解決せんとするものが、今日の政治問題の中心となつてゐる。だから政府

論家は政治時代は去つて經濟時代が來たと云ふほゞ、經濟問題以外

に於ても人民は如何に有効に其選舉權を使用せんかと今尙練習して居る

と見てよい。政治的には労働者も資本家と同等である。何故社會的にも

我々が組織してゐる政治研究會で

は、政治を科學的に研究するのみならず、無産階級を糾合した所謂無産

政黨組織の準備をしてゐたのである

が、多年の懸案と爲つてゐた普選案

も議會を通過して、從來の三百萬

の有権者が一躍一千萬を超ゆるに至

り、而も其新有権者の多数は無産者

に關する民衆である關係から既成政黨も俄に社會政策的な新政策を綱領

の中に加へんとして居るが之は外面を

白く塗りたてた墓の如きものであつ

て既成政黨の行ふ實際政治には何等

の變化はないものとしが考へられな

い。

君ははず

吾れも語らず木蓮の

ホロくと散る

夕べ悲しも

相見れば

深く黙して語らざる

君が瞳の

うら淋しけれ

もの思ふ

苦さしきと胸に秘め

初夏の夕べ

一人あゆめる

一トモツグ

馬場恒香

六月號は特別號として「反逆情史」を出版する、いつも同じ雜

誌では、編輯同人も、讀者もあきから、これから二年に二位

グランプソツト式のものを出す、定價は參拾錢だが月極の讀

者は普通號の拾錢でい、七月號のメ切は廿日迄たから、何で

もたまはぬドシ御投稿を乞ふ。

に政治問題はないと云ふ趨勢を示し

て血を流すことの愚なるを自覺し

水野公徳



財界の裏と表

× △ 生

◇
 去月飛鳥山の濠澤邸で埼玉縣人の懇親會が開かれるとキヤラメルの松崎某が自分と翁の寫眞入三色版をばききな景物に出す、其他翁をだしに使つた自己噴傳ビラが幾種類となくまかれた、さすがの翁も之には少からず迷惑したと見え會場以外にはまかぬ事の緊急訓令を發したが懇親會も斯くまでに利用されると一寸いや氣がさす、社長問題で行憎み、今度には利子問題で頓坐して居る建築會社も利子問題が片付いても實は尙一つ残つて居るものがあるそれは市會議員と權利株問題た之れは公然と交渉も出来ないし去りとして顔色や眼で知らさうとしてもなかく悟りがにぶいらしいので發起人恩案投首▼世間が不景氣で貸家と買家が多くなつて近郊の地價が下り始め土地會社は營業不振で定款を改めて貸家貸間の周旋を始める向が多い、造船所の鍋釜製造販賣と好一對▼最近好い面の皮の標本は、シアい事では天下にその人ありと知られたる竹中嘉藏老、口涉九銀七厘といふ前代未聞の高利にフラフラと来て、ウツカリ引つかつたのが餘り堅くない土佐セメント、出した虎の子は呼べど叫べど返つて來ず、エケツない目に會つた亡

驛がゲラ／＼と氣持よまさう。

◇
 各會社の上半期決算期が近づいて來た生産會社は在庫品の見積勘定を始め保險會社は地方代理店貸付と、未収入保險料調査にとりかかり、貿易會社は賣先延期拂と云ふ項目に重きを置いて、總勘定をする、處で此在庫品と未収入保險料と賣先延期拂と云ふ名目が、手品師の風る敷や、高利貸のいばんと同様種と秘密が藏せられ、むじなやたぬきもぐつてゐて、株主がまんまとばかされる、氣の難だが會社の在庫品直段附は市場の五六倍にもつてゐるのだから驚かされる、年二回の總會で株主から文句頂戴しても重役業だけは棄てられぬのも無理はない。

◇
 銀行會社の重役で候と、アンぞりかへつてはゐるが、増配だ増資だ合併だと囁り物のある場合、こそぞ役徳とばかりに裏へまはり、荒つばい稼せきに没頭するが常。
 ◇
 大概の場合に株の値が先走り、いよく物事が表面に現れる場合は、役徳連中が利蝨ひにかゝる順序、まるで斬り取り強盜は重役の慣ひといつた状態。
 ◇
 そのため相勸道で一つつたら終ひ

の言も生じたわけで、會社經營放漫の一顯因ともなる、即ち株をあやつるために、無謀な材料を作りたがる。しかも會社の内容が悪くなつたと來たら、眞つ先に賣りつないで置いて、遠慮會釋なくたきつけ、會社内容の挽回策は二の次にし、イの次に自分のふところを肥やしにかゝる。

◇
 されば、日銀利下げが事前に漏洩した形跡があるとの啓聞についても、薩ではゴソ／＼と非難するが、名乗りをあげて憤慨する實業家としては少い。

◇
 過去數ヶ年間、世界が何う動かうが、世間が何といはうが寒酸枯木による世捨人そのまゝ根つから動きさうにもなつた日本銀行も遂に滿五ヶ年牛振りで利下をやつた、先日、政友會の新長老小泉銀太郎老らしい邊から纏つた大口の買註文が出たソラこそ日銀利下げだと湧き返つた株屋町の血眼を冷やかに尻眼にかけて静まり返ること數日、業町人ども、モウ好い加減くだびれたらうと潮時を見てズバリとやつた音無しの構へなんか、大藏省も日銀も、とても大した腕前だ、小泉老は云ふまでもなく護憲内閣を捏ち上げた偉動者の一人だ、たとへ政友會總裁の更迭以來三派協調にヒツが入りかけて居る際とは云へ、これほどの大事を事前に聞はぐらす程また諒外もされてはゐまい。

▲近頃小銀行の苦しさは並大抵ぢやないが、銀行も身ぐるみ賣つたり貸したりするやうになると徹底したものだ、その辦何處迄も有利な條件でといふのだから氣が強い、當節は流石の安田買収王もタヤ／＼とある▲會社ゴロ征伐には警察も大分手を焼いて居るが、總會開際に株の損料貸をする爪長が絲を引いてるので、どうにもならんさうだ、それもその筈、さる爺さんなんか、土佐セメントで手は焼いたが爪だけはまだ健在とばかりセツセと磨きをかけて御座る。

◇
 無抵抗な女や無心の子供を絞殺して天晴武士道に泥金を塗つけた甘粕が假出獄の恩典に浴するさうだ、軍事探偵に持つて來いたから西藏方面へ送らうかと石光中將、福田大將が臆栗するとは噂に過ぎまい、彼の苦役を犠牲なりと見るに國憲と國法の尊嚴を思はざる沙汰で此の種の見法では假出獄が恩典と考へられまい。

大正十四年五月二十五日印刷
 大正十四年六月一日發行
 發行編輯 藤田 與次
 兼印刷人 藤田 與次
 東京大井一本松潮流社
 事務所 問題編輯部
 振替大阪七〇七九七番
 發行所 東京新聞社

高島屋吳服店
 松坂屋吳服店
 仁 丹
 ホシ胃腸藥
 三越吳服店



(前年廿)

々 人 る 廻 を 史 情

第一一三三五千五第

日 一 月 一 年 六 十 四 正 大 (二)

題



財界の裏と表

去月飛鳥山の灘澤邸で埼玉縣人の懇親會が開かれるとキヤラメルの松崎某が自分と翁の寫眞入三色版をはがきを景物に出す、其他翁をだしに使つた自己宣傳ビラが幾種類となくまかれた、さすがの翁も之には少々迷惑したと見え會場以外にはまがの事の緊急訓令を發したが懇親會も斯くまでに利用されると一寸いや氣がさす、社長問題で行儀が、今度には利子問題で頓坐して居る建築會社も利子問題が片付いても實は尙一つ残つて居るものがあるそれは市會議員と權利株問題た之は公然と交渉も出来ないし去りとして顔色や眼で知らさうとしてもなか／＼悟りがにぶいらしいので發起人思案投首▼世間が不景氣で貸家と賣家が多くなつて近郊の地價が下り始め土地會社は營業不振で定款を改めて貸家貸間の周旋を始める向が多い、造船所の鍋釜製造販賣と好一對▼最近好い面の皮の標本は、シブい事では天下にその人ありと知られたる竹中嘉藏老、日涉九鐵七厘といふ前代未聞の高利にフラフラと來て、ウツカリ引つかつたのが餘り堅くない土佐セメント、出した虎の子は呼べど叫べど返つて來ず、エケツない目に會つた亡

鐘がゲラ／＼と氣持よささ

各會社の上中期決算期が來た生産會社は在庫品の見始め保險會社は地方代理店未収入保險料調査にとりか易會社は實先延期拂と云ふきを置いて、總勘定をする在庫品とか未収入保險料と期拂とか云ふ名目が、手品敷や、高利貸のいばんと同密が藏せられ、むじなやたぐつてゐて、株主がまんまれる、氣の毒だが會社の在庫は市場の五六倍にもついでだから驚かされる、年二回株主から文句頂戴しても重

銀行會社の重役で候と、かへつてはなるが、増配た併だと鳴り物のある場合、儲とばかりに裏へまはり、弊せさに没頭するが常。

大概の場合に株の値が先よ／＼物事が表面に現れると役徳連中が利障ひにかゝる際るで斬り取り強盜は重役のつた状態。

そのため相勸進で知つた

反 情 史

藤 田 浪 人



1925

特501
476

第一編
赤い太陽

◆ 一葉落ちて	一
◆ 一品料理	四
◆ 平民社の騒聞	七
◆ 貧乏人の安息所	九
◆ 生腕事件	三
◆ 尾行が青くなる	四
◆ 俺を殺せッ	七



77W33754

— 第五編 —
恐 怖 時 代

◆ 官憲の迫害	二七
◆ 獄中の挨拶	二九
◆ 法廷でスツパダカ	三一
◆ 偉大なる低脳兒	三五
◆ 戀愛合戦	三七
◆ 極端なコントラスト	三九
◆ 赤旗の國へ	四一
◆ 荻を突け	四三
◆ 亡命の旅へ	四五
◆ 大事の前の小事	四七

— 第四編 —
渦 卷 く 焰

◆ 主義者の生活	五
◆ 革命歌の由来	六
◆ 問題の刀	九
◆ 戀の三角關係	一〇
◆ 糞の米騒動	一四
◆ 未だ死せず	一七
◆ 尾行旅館	二一
◆ 馬上の雄姿	二五

赤い太陽 第一編

◇一葉落ちて

日本は今二大強國の挾撃を受けて居る。一方は世界で唯一の共産主義の國ロシアであり、他方は世界最大な資本主義の國アメリカである。その真中に挾まれた日出の國は、組織としては最も形の古い軍國主義的資本主義とも云ふべき國家である。此三ツの國が今後如何變化して行くかと云ふことは、人類の歴史の將來を暗示するものであると思ふ。

明治維新の當時と現在の日本とは、時こそ異え内憂外患交々至ると云ふ點は最も似よつて居る。徳川幕府の末相州の浦賀や周防の赤間ヶ關へ外國の軍艦が

來て開港を迫つた時『日本は神國なり』とのみ自惚れて居た幕府の役人は、蜂の巢を壊したやうな大騒ぎをした。遙の沖合から一發ドンと放せば、自分の首が吹き飛ぶ精銳な大砲のあることも知らぬ、劍術とやらの名人はクロ船に梯子をかけ柴をかついで行つて火をつけ、軍艦を焼却すると云ふ名案を考へて居たそう。

何しろ大正も十四年と云ふいま頃、治安維持法などがノサバリ出る陽氣だから地下數千尺と云ふ地層から前世紀の怪物、マンモスの骨でも掘り出されたやうな珍現象だ。向ふは殿様だから『苦しくない近う〜』と云ふが、一般民衆は芝居や活動寫真を見て居る譯でないから苦しくて堪らぬ。自分の頭の後れて居ることも知らず、思想善導なんて亡者の引導見たやうなことを、生臭坊主に相談して居る連中だからトテモやりきれたものぢやない。

名は忘れたがアメリカには日本のイタチ見たやうな屁の上手な動物が居る。

此奴の屁は全く天下一品で一度御見舞を受けるとどんな猛獸でもヘキ〜するそう。此先生が或日汽車の線路内に遊んで居た時、ゴウ〜と音を立て、文明の怪物が進行して來た、早速例のを一發放して撃退せうとしたが文明の怪物には神経がない。放屁先生どう〜轢殺されて仕舞つた。誤れる愛國心の所有者大和民族とやらの日本魂も此動物に似た所がある。世界の氣勢も知らず澤山の人命と財力を浪費しシベリアへ出兵して赤い國をイチメて見たり、太も、出すことを嫌ふ白い國で裕掛かなんかで押廻されちや排斥されるのは無理もあるまい。

日本人は無暗に赤い物を恐れる癖がある。赤い物が恐ろしくては第一女房は持てぬ譯だ。芽出度い時にこしらへる赤飯、法廷で被る検事の服の襟は赤いで

はないか、今度の議會では「赤い腰巻を用ゆべからず」の法律でも制定せねばなるまい。そんな下らぬことを恐れて居らず、社會主義とは何か、何が故にそんなものが勢力を得るか云ふことを研究しては如何か、危険思想があつて危険な事情が出来たのではなく、危険な事情があつて危険な思想が生れたのだ。法律はクモの巢の如く出来、查公が何千人殖えたつて、國民の胃袋が空では花の都が強盜の都と變る、『一葉落ちて天下の秋を知る』とは浪花節の枕言葉ではない、今の世、眞に之を解し得るもの幾人かある。

◇一品料理

今でこそ警視廳の黒表にのつて居る主義者だけでも東京に千人も居ると云ふが、廿年前は漸く二三十人に過ぎなかつた、それも今日のやうに労働組合が

ある譯ではなく、著書と云つても幸徳秋水の『社會主義神髓』片山潜の『社會主義』堺利彦の『社會主義大意』福井何とか言ふ人の『近世社會主義』があつた位のものだ、トルストイの小説を讀んで社會主義者になつたと言つた様な人の多かつた時だから『社會主義者は女郎買に行くのは不眞面目だ』とか『酒を呑んではいかん』と言つて問題になつたこともある、時々茶話會を開いてせんべいを噛りながらお互の感想を話し合ふ程度のものであるから、思想も幼稚でありどこか坊生臭い所があつた。

その頃アメリカから歸つた片山は、妻クンを失つたので新に夫人を迎へることになつた、何分洋行歸りのマスタオブアツと云ふのだから非常なハイカラで女中の五人に書生の三人位は居るだらうし、三度々々洋食だらうと思つて居た所が、勿驚その聲殿が結婚の前日手拭で頬かむりをして煤掃をやること云ふ騒

だ、料理もすれば飯も焚く、漬物などは近くの漬物屋へ自身で出掛け、菜漬でも澤庵でも風呂敷にも包まず、手づかみで歸つて來ると云ふ蠻カラ、新夫人の驚と思ひ違ひは一通でなかつたらしい。最も片山は米國に苦學して居た頃コックをして居たことがあるので、筆者もチョイ／＼御馳走になつたことはあるが洋食だけは却々上手に出來て居た、赤旗事件や大逆事件の後、政府の迫害が愈々酷烈を極めた時

『運動は當分出來ないし、仕事も片ぱしから妨害されて何とも仕方がないから、屋臺店の一品料理を始めやうぢやないか』と相談を受けたことがある、愈々開店することになれば、露農政府の顧問 セン・カタヤマがコックをやり、今名古屋で通信社をやつて居る鈴木と浪人だが、出前持をすることに決つて居たのだ。

◇平民社の艶聞

日本の社會運動が空想より科學へと實際的になつて來たのは、永らく海外に居た片山が歸朝して雑誌『勞働世界』を創刊して勞働運動を始め、幸徳や堺が非戰論で社長の黒岩と衝突して朝報社を退き、『平民新聞』を發行して社會主義を宣傳した以後のことである、最もそれより前にも研究的なものは出來たことはあるが、例のアインスタインの『相對性原理』見たやうに、一般民衆には何が何んだか判らぬ内に、影の如く現はれ烟の如く消えたのである。

當時平民社へ二名の婦人が現はれた、一人は堺夫人爲子であり、他の一人は西川光二郎夫人文子である、堺は戀女房に死なれ赤ん坊の眞柄さんを抱いて困つて居た時であり、文子は夫君の松岡に先だゝれて空閑の〇しさに惱んで居た

時であつた、今でこそ孫の子守でもしそうな老人になつたが、當時は未だ三十前後の血の多い革命家である、落花心あり流水豈情なからんやで、春の夕、秋の月に戀の幾場面があつて現在に至つた譯である、外に石川三四郎と自由黨の女豪影山英子との情事があり、當時のやまと新聞は永い間續物を書いたことがある。賣文社が日比谷のヤマカン横町にあつた頃、誰のいたすらか二階の壁に『お○○○何とかの雨』『お○○○何とかの風』と芝居の藝題見たやうな字で、上手に書いたのを貼りつけてあつた。

茲に特筆大書すべきことは、寒村荒畑が紀州の牟串新聞に居た頃、同じ社に居た管野幽月を見初め、苦しい意中を打ち開けたが思ふやうにまごまらず、詩人肌の寒村は巖頭より激浪めがけて飛び込まんとした其時、舉動不審と後から附て來た幽月に抱き止められ、劇的の戀的一幕が芽出度く大團圓を遂げ、何の

風波もなく琴瑟相和して居たが、彼が赤旗事件で獄に下つた後秋水との間に、面白からざる風説が立つた、傳へ聞いた寒村は暗涙に咽んだと言ふが、幽月は間もなく大逆事件に連座して絞首臺上の露と消えた。

◇貧乏人の安息所

週刊平民は朝憲紊亂で發行を禁止せられ、同紙の印刷所であつた築地の國文社は機械まで沒收されて青くなつた、其後竹内兼七と言ふ同志が出資して今の新富座の隣で日刊平民新聞を創刊したが、政府の迫害と財政困難の爲め二ヶ月ばかりで廢刊になつた、その後大阪で森近運平が日本平民新聞を出し、東京では片山と西川とが社會新聞を出した。

社會新聞の編輯は主として西川と赤羽嚴穴とがやつて居た、嚴穴はその六ヶ

しい顔にも似合はず、宮武外骨の經營して居た滑稽新聞を買つて来てニヤリ／＼と氣味の悪い薄笑を造りながら讀んで居た、何分色氣と疝癢を賣物にして居る新聞だけあつて、眞赤な腰巻一つの女が蚊帳を釣たりして居る、頗る兆發的の繪葉書が刷り込んであつた。

浪人も今でこそ海千山千の横着者になつたが、當時は田舎から出立てのホヤ／＼で、少くとも質朴と剛健を以つて自ら任じて居た、此糞眞面目な青年が此光景を見たから堪らない。

『赤羽、君は革命家を以つて任じて居る者が、そんな不眞面目な雑誌を見ると言ふことがあるか』と一喝を喰はしたものだ。

『世の中のことはそう一本調子ではいかぬヨ、眞面目の中に不眞面目があり不眞面目の中に眞面目がある、君は此雑誌の本質を知らないのだ』と笑つて居た。

その後私はその雑誌がスキになり、一號も見落すことの出来ぬ程の愛讀者になつて仕舞つた。

或日外出先から歸つて來ると、嚴穴がブン／＼怒つて居る『どうした赤羽君』と聲をかけたら、今迄で見て居た新聞をほうり出し。

『君常陸山が一度にさしみを五圓づゝ喰ふそうだ、誰も頼みもしないのにクソ力を出しやあがつて、五圓あれば貧乏人は一ヶ月喰へる』と憤慨して居た、その時分は物價の安い時だつたから、しるゝタクワンで我慢すりや飯屋で一食五錢位で喰へたことは事實だ。

社會新聞の分列後、赤羽は郷里信州へ歸り山崎伯爵家に食客をして居たが、秘密出版で告發せられ千葉監獄で牢死した、病が重くなつた時假出獄の通知が來たので彼の親友逸見が引取に行つたが。

『無産者には以上の安息所はない』と行つて、どうしても出獄しようと言はなかつた。

◇生腕事件

片山や岡が社会主義の演説會を下谷上金杉三島神社の向の寄席（今は壽亭と云ふ）で開いた時間會後間もなく、赤松勇吉が樂屋へ飛込んで来て『先生どうどうやつつけましたよ』と云つて息をはまずせて居る、片山は『フム』と云つて微笑する、外の者は『何事だらう』と怪訝な顔をして居ると、漸く事實の真相を赤松が話した。

石川島造船所の煉鐵工場で、金子庄藏と云ふ二十二になる職工がスチーム、ハンマーの爲めに右の腕を打碎かれたから、早速京橋築地明石町の田村病院へ

擔ぎ込んで、夫れを切斷した、同僚は氣の毒がつて、一同から醜金して百五十圓を送つたが、會社は一錢もやらない、其當時の支配人は平澤道志と云ふ人で赤松とは同郷人である爲めに、赤松が懇願的に補助方を願つたが、當會社にはそんな規則がないから、遣る事は出来ないと斷然拒絶した。赤松は大に憤慨し、『社長澁澤榮一何者ぞ、常に道徳を口にし社會の師表を以つて任じながら此の悲惨事に對し、假令規則の制定なくとも一滴の涙あるべき筈である、彼れをして反省せしめずんばあるべからず』と、決然として退社の覺悟を極め金子庄藏から生腕を貰ひ受けて新聞紙包みとした、表面には『工業案内見本』と記して通運會社の配達便に託した、翌朝十時頃深川富澤町（其頃の本邸）澁澤家に届いた、何心なく包を解くと、中には菓子箱がある、蓋を開けると、血潮未だ乾かざる男の片腕であつた、家中驚て色を失ひ、早速警察署に届け出でた、

警察は時を移さず取調べると、赤松の義憤の仕業であつたと云ふ事が知れて、警察に召喚せられたが、犯罪が構成しないと見えて間もなく歸つて来た。

當時活版工の機關『誠友』は『百の碎けたる腕は猶ほ甘受せむ。しかも一の生きたる腕の贈物あらば彼等は遂に如何とする』と批評した

◇尾行が青くなる

三崎町時代に名古屋の同志で保知と言ふ男がやつて来た、保知は醜男の見本見たやうな顔をして居たが、妻クンは評判の美人であつた、榮町邊で洋品店をやつて居たが、雌雄淘汰の法則通り美人の妻クンに逃げられてヤケを起し、折角賣込んだ店をタ、キ賣つて上京して来た。

保知は尾行を捲くことは古今無類の名人であつた、何時も捲いてばかり居た

のでは面白くないと言ふので、一日喰ふだけのパンを買込んで風呂敷に包み、鞋に脚絆と言ふ旅支度、アルプスでも踏破すると言つたやうな格好だ、朝早くから彼の健脚にまかせて東京の郊外を日暮里から品川まで、夜の九時頃まで歩き通した、保知は食糧の準備は出来て居るから歩きながら、バックツイテ居たが尾行先生は晝飯も喰へず晩飯も食はず、然も和服に下駄と来て居るから思ふやうに歩けず、全く文字通りに青くなつて仕舞つた。

尾行制度は桂内閣時代からやり出したものであるが、殊に大逆事件以來は、主義者と言はれる程の者には全部尾行した、甚しいのは毎日小供相手に飴賣をして居た男までに附たことがある、最初の内は口もキかすお互ににらめつくらをして居るが、それが五日となり十日と續く内には、ごちからからとなく話かけるやうになる。

『オイ尾行君、芝居を見に行かうか』

『いゝですなア』と早速出掛ける、尾行のバスを利用して電車もダブ、芝居も無料だ、然し芝居ばかり見て居たのでは腹が減つて仕様がなない。

『オイ尾行君、人力車に乗らうか』

『そうですなア』と車夫も居らず歩きもせず、つゝ立たまゝで麻布へでも赤坂へでも人力車に乗る、その費用を警察へ請求して牛肉を喰ふのだ、こんなことを言つたら警視廳は驚くかも知れぬが、心配することはいらぬ、近頃の尾行にはそんな偉いのは居らないから。

尾行については面白い珍聞奇談は山程ある、それを一々書いたらそれだけでも悠に一冊の本が出来、浪人が片山や鈴木と全国遊説に出掛けた時、名古屋で失敗したことがある、町の名は記憶はないが、小さい横町を二つばかり曲つ

て細い露路へ這入つたのはいゝが、當地不案内と来て居るから行止りとは知らず、あつちへ曲りこつちへ抜けやうとしたが、どうしても出ることが出来なない、残念ではあるが仕方がないから元来た道へ戻つて来ると、尾行クン露路の入口にニヤ／＼笑ながら立つて居た、大杉の電車飛乗りの早業、總同盟の西尾末廣が大きな石を風呂敷に包んで持たせたなどは有名だが、水谷が富山の宿屋の隣室に寝て居た尾行の手帖から、報告書の一部を抜書したのを新聞に発表したので、首になつたなどは悲惨な滑稽であつた。

◇俺を殺せツ

山口義三の出獄歓迎會の歸りに赤旗を押し立て革命歌を高唱したと言ふので、警官との組打となり中にも大杉榮は得意の柔道で幾人も巡査を投げ飛ばした

ので、その腹いせに錦町署へ拘留してから大杉だけを外へ引出し、巡査が五人も十人もして殴りつけた、イクラ腕力自慢の大杉も多勢に一人では何とも仕方がない、メチャ／＼にやられて居るのを監房の中から見居た猛者連、怒髪天を衝くやうな騒をしたが、籠の鳥ではどうすることも出来ない、中にも激情家の荒畑などは、留置場の格子を鼓いて

『一人の人間を五人も十人もして殴ると言ふ法があるか、ヒキョウ者奴……サア大杉を殺すなら俺から先へ殺せ！』と怒鳴り立てた。

當時注意人物を専門にやつて居た刑事では、麴町署の網島、神田警察の久保などが最も古く主義者間にも知られて居た、その久保が自分の管轄内であつた爲もあらうが、よく社会新聞へ来た。

『オイ久保、此間君の署では大杉をウンと殴つたそうだな、覺えて居れ、今度

革命が来た時は、貴様を一番先鎗玉に上げるぞ』と威喝したら、ワイロの心算か二三日してから竹の皮に包んだ牛肉のコマ切を五十錢ばかり届けた、浪人は此男と女の鞆當をやつたことがある、久保がその女に。

『あいつは社会主義者になつたので實家からは勘當される、政府からはお尋者になつて居る、早晚首の飛ぶ奴だから、あんな男を思つて居ても將來望はない』と女をけしかけたが、先方は年上であばた面、こつちは紅顔の美少年だ、戦はずして勝は浪人にあつた譯だ。戀に破れた彼は、復讐の念止め難く犬糞的に各新聞社へ通信をしたので、ポンチ繪入りで書き立てられたのには流石の浪人も閉口した。

その頃、神田署にそば屋の屋號のやうな更科と言ふ『演説の中止』の上手な警部が居た、社会主義者で演説をしたもので此警部の中止を受けぬ者はない位

だ、説き行き説き来り滔々數萬言壇上の辯士の言が熱して来る、満場の聴衆は片唾を呑んで居るその時、臨監の更科警部はツと立ち上り、そり身になり臨監席のテーブルの上へ上半身を乗り出し、左の手に持ったサーベルをガチャンと一つ突いて。

『辯士中止！』と来る、その聲が頭の先までピンと来る、浪人なども治安警察法に抵觸する頃から演説をして居たので、可成ズウ／＼しくなつて居たから大抵の奴には驚かなかつたが、此男に中止されると、息がグツと止るやうな氣がした、若し名人と言ふ名が許されるならば、之が中止の名人とでも言ふのであらう。

社會新聞社ではよく演説會をしたが、政府から特に命令でもあつたものか、辯士が演壇に立つて一言か二言云ふとすぐ中止と来る、疍持癩の鈴木はその仇

討の心算か、一度に向ふ三十日間政談演説の届出を出したことがある、之には流石の警察側も閉口したと見え手心が違つて来た、『萬國社會黨日本支部』とか『私立日本政府』など、言ふ大きな看板を出して、巡査と嘩喧したのも此頃であつた。

反逆の悲哀 第二編

◇他人事でない

フランス革命史に、こんな一節がある。

生活の苦しみに壓されて、その瘦せた面に、勞苦の暗い影を浮べつゝ、人らしい生活の出来なかつた、農民の群や各都市の勞働者、殊に、パリに於て浮浪生活を送つて居た群が、氣むづかしい顔をして、始終、貴族や富豪を咀ひ、パンや砂糖に飢えて居た、種々の政治的壓力と階級的壓力とが、二重三重にかさなり合つて、恰度彼等は重い大きな石に、押しつぶされて呻吟いて居るやうなものであつた、農民が一番、苦しめられたのは、封建制度の係を留めて居た狩

獵法であつた、歴代のフランス王は、狩獵を好んで、全國に公領地を設け、それを貴族の專用に當て、居た、その獵地の周圍には、垣も籠も置かなかつたので、野猪、麋鹿などの群が度々やつて來て、耕作物を蹂躪するので、毎年大きい損害を農民に與へた、彼等はそれを嫌つたが、訴へて出る所がなかつた、若し政府に反抗して直に訴へて出ると、却つて嚴しく叱りつけられた上、重い罰を受けなければならなかつた、政府は又農民に、『小鳥の糞を凍死させるから、雜草を刈つては不可ない、鳥類の香味を失ふから、糞汁を肥料に用ゐては不可ない』と嚴命した。

こうしたウルサイ命令は、非常に農民を苦しめた、けれども彼等は、それを如何することも出来なかつた、そればかりでなく、地方の舊君主（貴族）は、ルイ十四世時代から與へられた特權を利用して、農民を酷遇した、農民等は、

此小さな暴君に對しても種々無用の義務を荷はなければならなかつた、彼等が結婚する時は、鶏などの献上物を送り、土地を授受する毎に、貸級税を收め、道路などの修繕の場合は、無給で手傳はねばならなかつた、其上、人頭税（徴兵免役料）、什一税（各人収入の十分の一を收む）等の義務も、荷はせられて居たので、彼等は年中、政府や貴族の爲めに汗水を流して働き、耕作するに過ぎなかつた、比較的の神経が鈍くて、素直な彼等も、流石に政府と貴族に對しては、窃に燃ゆるやうな不平を抱いて居た。

不平は獨り農民に留まらなかつた、商工階級、労働階級の中にも、それが烈しく渦巻いて居た、彼等は當時、モンテスキューや、マルテールや、テドロールや、ルソー等の新思想に共鳴して、知識的にも政治的にも、目ざめた者が多かつた、彼等の眼から、その項のフランスを見ると、暗黒の地獄のやうに感じら

れた、當時貴族に亂用せられて居た、『レット・ド・カシエー』と云ふ逮捕状は何の理由も相手に知らさないで、勝手氣儘に罪のない者を牢獄に投げ込むことが出来た、或將軍は、一平民の妻に懸想して、その女を自由にしたい一心から、賄賂を以つて巧みに逮捕状を手に入れ、何の罪もない夫を突然拘禁したと云ふ話さへある、これなどは人權を無視した甚だしい實例の一つであるが、その他入市税、通行税などがあつて、商工業の發達を妨げ、官職の賣買、官吏の收賄なども亦旺んに行はれ、政治的に自覺した者には、非常に不快の感じを與へた。

斯くして商工階級の人々は、如何しても此不自然な、不合理な政治状態を打破らねば眞の政治的自由が得られないと同時に、自分の業務も榮えないと思つた、無智な労働階級の人々は、別にはつきりした政治的自覺を持つて居なかつ

たが、次第に擴がつた産業革命の大波に揺られて、職業を失つた者や、浮浪生活を續けて居たものが、可なりによくパリの一隅に居て、何となく貴族や、僧侶の特權と榮華を見て、それを自分の苦しい生活と引きくらべ、絶えず強い反感を抱いて居た、而して日毎に苦しくなりゆく胃の腑の問題については、半ば絶望し、半ば自棄した形となつて居た、不平の叫びは、彼等の間に未だ高い聲で叫ばれなかつたが、重く鬱積して、いつか、一時に爆發しそうに見えて居た。

以上は革命前のフランスの實狀であるか、時こそ異ひ、事情こそ異なり、重税や悪法に苦しみ、生活苦、失業苦にあえいで居る日本の現狀を見て、何者かよく大平無事と斷言し得る者ぞ、帝政時代の露國議會に於ける政府委員の辯明に、『ドイツやフランスには、社會運動が猛烈に行はれ、従つて危険思想が流

布されて居るが、幸ひ我ロシアには多少そんな仰向のないこともないが、取るに足りない者であり、且つ當局は嚴重に取締つて居る』と云つて居たが、それから五年もたぬ内にあの大革命が來たのだ、或貴族の如きは『彼等よく何する者ぞ』と嘲り、革命の前の晩まで自動車に乗り廻して居たが、翌日革命軍の流弾に當つて大理石の玄關で血烟を上げて斃れたそうだ。

◇ 幸 徳 の 手 紙

明治四十三年の夏、天下を震撼せしめた大逆事件が突發した、此事に就ては筆者は腹藏なく言ふ自由を持たない、當時東京監獄に居た是等の人々から、友人や妻子に宛た手紙の中には、涙なくして讀むことの出來ぬものや、人生と言ふことに對して深刻に考へさせられるやうなものが多い。

幸徳の人生観は次の五言律に盡きて居る。

昨非皆在 我。何怨楚囚身。才拙惟任命。途窮未禱神。死生長夜夢。

榮辱太虛塵。一笑幽窓底。乾坤入眼新。

此詩の書いてある堺宛の手紙の中に『考へれば、考へるほど宿命論の信者になる、遺傳の因と境遇の縁とで作り出す運命てふ大波には、意志の自由も力もあつた者ではない、但だ一片の木葉の漂ふと似て相似たりだ』彼の最後の手紙には、更に左の一節がある。『先づは善人榮えて悪人滅び、めでたし／＼の大團圓で、僕も重荷を卸した様だ、今日は氣も心ものびやかに骨休をして居る、是から數日間か數週間かしないが、讀めるだけ讀み、書けるだけ書いて、そして元素に復歸するやうにしよう、一切人の世の面倒な義務も責任も是で解除となる譯だ、但だ覺悟の無かつた多勢の被告、殊に幼い子供のある人や、世間

を知らない青年などに、如何にも氣の毒でならないが、然しドウする事も出来ぬ、難破船に乗合せたとても思つて觀念して貰ふの外は無い、君等も出来るだけ慰めてやってくれ、一塵一毫の生滅も全く無意義ではあるまい、又何等かの因縁になるのだらう』。

小泉策太郎宛の手紙の中には、一層明瞭な言葉が現はれて居る。『愈々何もかも千秋樂となつた、おれも肩が軽くなつたやうに覺える、死といふ者は高山の雲のやうなもので、遠方から眺めてゐると大した怪物の形にも見えるけれど、近づいて見れば何でも無いものだ、唯物論者にとつては、左右に振つて居た柱時計の振子が停止したより以上の意義はない、殊に親もない子もないおれは、率九なんぞ大丈夫だから安心してくれ』。

幸徳の母は、判決の數日前最後の面會を濟まして、郷里で自殺をした。

◇内山の手紙

愚童は曹洞宗の僧侶であつた。最初の事件の時、堺夫人によこした手紙の中に、『全體こゝに居ても外に居ても死ぬ時は死ぬので、チツトも先の事は心にかけません、人生の半以上を自由にやつて來たのであるから、これから眞面目に修養するのも亦一段の風流です』『一日の苦勞は一日にて足れり、日々是好日で、朝は汽笛で生れたと思ひ、晩は號令で涅槃に入り玉ふ、人から見たら大道のちまたに彷徨して居ると云ふであらうが、自分はこゝの凡て五感に觸るゝ者が研究の好材料で、大學で實地研究をして居ると思つて喜んで居る』。

其後の手紙の中には『寒い〜今日は雪が降る、こんな寒い日に火の氣のない監房の中で手紙を書くのも餘り面黒くないことではあるが、扱死刑の恩命に

接して見ると懶けても居れないので、入監以來多大の厚意を受けし夫人爲子さんと、先日僕のバイブルを差入れてくれた君に對して、最後の何か書かねばならぬ』『願はくば目をつぶる前に一度遇つて大いに笑談をしたいのだが、それも出來まい……、先日君の送つて呉れたバイブルの中に『義朝は拔身ひッさげ討死せり』と云ふ句があつたが、吾等二十四人も近々拔身だけはひッさげて討死することになつた、オット幽月だけは例外だ、こんな馬鹿言つて居る中に用紙が半分なくなつた、併し安心してくれ、君の送つてくれたバイブルは死ぬまで読んで居るから、實は何か彫刻して記念に送りたいのだが、今は駄目だ。』愚童の謂ゆるバイブルとは、珍袖本の『柳樽』である、彼は坊主の癖に、平生から善く女の話をする事が好であつた。

◇ 管 野 の 手 紙

幽月は初から善く覺悟を定めて居たらしかつた。別に纏つた人生觀といふ程のものは見えぬけれど、方々に送つた手紙の中から、切々の文句を集録する。

『折角やりかけた英語なども……まあ精々ブランコ當日まで一字でも多く覚えて置きませう』

『日が永からうと皆に云はれますが、私には日が短くて何をする間も無いやうです、一定の日課が終らない中に、いつでも夜先生が無遠慮にやつて來ます』

『其中には裁判も決定して不幸な短生涯の終の幕が引かれるで有らうと待つて居ります』

『公判は濟んだし、愈よ用なしになつたので、元日から獄中日記の様な一種の感想録を少しづつ書きはじめました、追想、感想、懺悔、希望、何でも思ひ浮んだまゝを率直に書いて置きます』

『元日から三晩つゞけて觸體葬式の夢を見ました、夫がいつも臺灣に關係があるのです、松ちゃんに何か變りでもあるのではないかと、少しカツイで案じて居ます』

『どうせ先の知れた短い命ではございますが、生のある間はどうか折ふし御便りを願ひます』

『もう何時迎へに來られても思ひ残す事はありません』

『ウント御儲け下さい、雜司谷の土の下から氣永く拜見して居ります』

『これを願へば私はモウ此世に何も思ひ残す事は無いのでございます』

『何事も運命と御許願上候』

『これも運命、又不幸中の幸とも申すべき乎』

是は大逆事件の起る前のだが、幽月から秋水に送った葉書の中に、

『お天氣の加減か、今日は気分がわるい上、胸が痛んで、二三時間裁縫をしたばかり、終日悲観して暮しました、無意義な人生！私は此冷たい空気を永く呼吸するに堪へません、生！生の苦痛！人間といふものは何の目的があつて此無意味な悲惨な旅を續けるのでせう？』とある。

宣告を受けた後、二三の人と共に面會した時、彼は其平生にも似ず兩の頬の血色極めて善く、稍釣上りたる濕みがちの眼に微笑を湛え、頗る快活に別れの物語をした。そしていよ／＼の別れ際に、更に笑つて皆と握手をしたが、只最後に、堀保子と握手した時、さすがは女同志、二人同時にワット泣伏した。

其後幽月から保子に送った手紙には斯う書いてある。

『保子さん。私はあなたのお手を放す事が出来ませんでしたよ。一時に涙が溢れてね。覺悟は充分して居るんですけど、皆さんのお顔を見ると、矢張り弱い人間ですから……。』

『又来て下さいと申しましたが。あれはもう取消します。私は此上お顔を見るに堪へません。』

『〇〇に……絞首臺に上るまで健康を祈つて居ると御傳へ下さいまし。』

『刑がきまつてからは毎日追かけられる様で忙がしくつて、ちつとも物を考へる暇がありません。』

—(くろがねの窓にさしいる日の影の、移るを守り今日も暮しぬ)—

◇松尾の手紙

『小生も少しは科學や哲學の本も見たが、幾ら見ても妻から來る手紙の其の一行の力に抵抗するほどのヤツは一つもない。惣領の奚司郎（當年七才）は習字が上手なそうで、或日學校の先生から甲をとりて歸り、母にほめられ思はず『おとうさんに見せたいなア』と申せし由。之を見た僕の胸は裂けました。兄よ人間はこゝに行くと弱い、皆小供だ。僕は思はず『オ、神！』と叫びました。そして此瞬間、僕は眞に愛を意識しました』とある

『小生如き、まだ絞首臺に對してチトはづかしき身柄なり。』

『大抵に人を泣かせ玉へ。斯く申せば小生は泣いてばかり居る様なれどそんなものでなし。泣かぬ方面に於ても我ながら感心すること多し。句もあれば温

味もあり、御安心あれ』

松尾から細君に送った手紙の中には、精神主義、絶對他力、靈魂不死等の信仰が到る處に溢れて居る。唯物論者、若しくは汎神論者の多い中で、『紅一點』の感もある。

『あゝおとツさんに見せたいと思ふ心が、小供心にもヤガテ神を求め如來を頼む心にては候はずや。』『私はまだ神を見し事は無けれども、その求めむる心をたどり行くのみにてさへ、早や何となく心おどり喜しき感じを覺え申候。』
『御身のあるところ私あり、私のあるところ御身あり、百億萬里を隔つと雖も何かあらんにて候。』

『されば東京監獄にある私よりも、御身の内にある私を眞の私として奉じ下され度候』

『先便にて申し上げたる、御身のあるところ必ず私ありとは、單に手紙の土の文字のみでなく、實に眞實の眞實にて候。』

『私は彼の人等の手紙を見て泣いた。そして神に謝した。亡き父母の靈に謝した。あゝ嬉しい事には私はモウ亡き父母と自由に靈交することが出来る様になつた。静枝よ、御身も神に離れぬ様に慎みなさい。小供にもかくれたるお召給ふ神の光にぬかづく様に教へてくれ。』

『今日は十八日なり、判決言渡し日なり……。死刑か……まさかと思つて居る』
『併し自分は最うチャント準備が出来て居る。ドンナ事があらうともピクともするな。愛は永遠なり、愛は永遠なり。』

『自分は今神のお召に應じて行くが、御身にはまだ残されたる仕事がある。』
『肉は死ぬる、靈は死なぬ。絞首臺上で死んだ夫は肉だ、靈はモウ救はれて

永遠に生きて居る。そして不斷に御身の裏に宿つて居る。イヤ肉も死なぬ。お互に肉はモウ二名の子供となつて居る、そして永遠に生きるのだ。罪なきに刑せらる。御身よ恨みること勿れ。こゝに神あり、こゝに如來あり、こゝに救済あるに候はずや。』

『私は此に社會の爲だとか、人道の爲だとか申しません。私にはソツナ大それた資格は有りませぬ。私は唯だ私の死が御身と小供を眞生命ある純潔な生涯に導く縁となるかと思へば、私はそれで満足です。』

『面會に上京したしどの思の浮ばんも無益なり……。御身も今は不斷に私を宿し居られる身に候はずや。何の安からざる事や候はん。御身よ相互の愛は永遠に候はずや。』

『自分はモウ光明を浴びて居る、決して心配する事は無い。』

『泣くのみが貞女でも烈婦でも無い……。行先き長き御身です、或は風もあらう、雨もあらう、然も今日の此の心を、今日の此の胸の思ひを忘れ給ふな。』

『相愛の夫に死別れし、まだ年若き女性を主人として、年若い給ふ父と、天使にも似たる二名の孤兒を配したる、清き淋しく小き家庭……そして之は誰の家庭でもない、誠に誠に彌陀のさづけ給ひし貴い御身の家庭では無いか。願はくば御身よ、十年、廿年、卅年、はて御身が祖母さんになるまで、今日の此の貴い思ひを忘れ給ふな。そして彌陀のさづけ給ひし純潔な生涯を全うし給へ。』

『小供には別に書き残す筈です、併し要は暗黒を去って光明に導くので有ります。肉の生活を去って靈の生活に入らしむるに在り……。嗚呼信じまいとても信せず居られぬは如來です。南無阿彌陀佛は唱へんとして出るのでなく唱へまへとしても出て來ます。』

斯う云ふ風な手紙ばかりの間に。

『今日浴後、鼻毛を抜いて居たら白いのを一本引き出した。僕も最う三十三だなアと思つた。』

と云ふ一節と。

『死體は貰へるかどうかわらぬ。貰へるなら骨にして送らう。葬式するに及ばぬ、針箱の引出しにでもしまっておけ。』

と云ふ一節とを見出したのは、何だか斯う特別に趣味のある様な感じがする。

監獄で松尾の所持品を受取つた時、衣類や書籍の間から、大きな珠數が出て來た。是は教誨師に頼んで貰つたのださうな。

◇古河の手紙

彼は多言せぬ所に趣きがある。叔父なる人に送った手紙には、只『私の死ぬのは構ひませぬが、両親や弟妹の事を思ふと實に堪へられませぬ。それでどうか後の事を何分宜しく御願ひ致します。皆々様の御健康を祈り、茲に御暇乞申上ます。左様なら。』とある。伯母なる人に送ったのも殆ど同じ様な、極めて簡単なものである。

岡野辰之介宛のも同じく簡單で。

『今更致方ありません、今日か明日かとピク／＼し乍ら待つて居ります。時のたつのは早いこと、死ぬのはいやなものです』
とある。大杉宛のには。

『左様なら、御機嫌よう、近々出立致し升』
と只是だけ。

◇大石の手紙

彼の手紙には、何んにも實のある様な事は書いてない。只一つ宣告後によこした分には、何か最後の感慨も書いたらしいが、それは官没せられて届かなかつた。

細君に宛てた數通の手紙にも、家事向の事や、小供の事や、差入物の事の外別に意味ありげな事は何んにも書いてない。最後の一通にも、

『お前も此際よくよと思つて、うちに引込んでばかり居すと、髪も結び着物も着かへて、親類や知人のうちへ遊びに行つて』

など、細君を勵まし、又。

『私はからだも相變らず氣も丈夫で……、かうして何ヶ月過すやら、何年過すやら、又特別の恩典で出して貰ふ事があるやら、そのへんの所もすべて行末の事は何ともわからないから、決して氣を落さぬやうに』

と、何處までも只細君を痛はつて居る。

當時新宮町の牧師をして居た沖野岩三郎に送った手紙には相手が牧師だけに
チヨイ／＼宗教的の事が書いてある。

『バイブルや佛教の本をよみ私の信仰の上に多少發明する所もありました、私のこれまでの汎神的信念も理屈の上から云ふと申分なくとも、凡人なる我々の感情はごうもまだ之に満足が出来かねる所があります、と云つて今更偶像を拜むと云ふわけにも行かぬが、何かしら超絶的のものを求むるやうな心も起ります』。

起ります』。

『妻を宗教的にしてくれる事は甚だ賛成だが、今の處、出来るならば大いに愉快に樂天的にするやうな仕方をしてやつてほしい、祈禱だとか來世だとか云ふ事も、無論君の御職業柄、云はぬわけにも行くまいが、それと同時に教會の婦人方と社交的に遊べと云ふやうな事をさせてやつて貰ひたい』

『私が久しぶりに聖書を読んだの感想は……一口に云へば、馬太傳廿六の三十六節以下で、哀愁、懷疑、煩悶、矛盾に満ちた我々近代人と同じ血が、三千年前のキリストのからだにも通つて居た事、これやがて我々が彼に親むべく近づくべき點であると云ふやうな感じである』

『昨日教誨師の謂はるゝに、近代の人は死と云ふものをさほど恐れないやうになつてゐるから、傳道をするに死の問題よりも寧ろ生の問題を解く事が必要だ』

と。私はこれは大きにそうだと思ひます。一般に近代の人の心がそこへ向いて居るのは事實であります、今回の事件に付、私が最も苦しく感じるは、自分の妻子の弱い胸へ重き疵をつけた事です、彼は比較的しつかりしてるやうですが、……〇〇の老嬢のやうに厭世的にならないやうに御導きを願ひます、私は子供の世話をまかせる外、彼をば絶対に自由にしてやりたい。今から云ふべき事ではありませんが、出来得べくんば彼の前に再び新たなる歡樂の道が開ける事を熱望して居ます。』

ツマリ大石は自分の事よりか妻子の事ばかり案じて居たのである。宣告後に堺が面會した時には、其の平生の温厚柔和な微笑を湛へて。

『今更宗教の本なんぞ見たくも無い、大抵なものよりかコッチの方が上だからなア、それよりは此間君が送つて呉れた川柳などが大變い、』

と云つて、今度は一茶の句集を注文した。

◇宮 下 の 手 紙

姉婿山本久七に宛てた手紙の中に、こんな事が書いてある。

『兎に角…事件が事件ですから如何なる言渡を受けるやも知れぬ故ヨク／＼決心して上京を願ひ升、私は元より覺悟の上に覺悟をしての事なれば如何なる事に相成たりとて後悔などは少しもしませぬから此段御心配御無用』

『私の屍體の事に付、廿四名合葬にならず、各人其遺族が受取つて別れ／＼になると申す如き場合…監獄からすぐと谷中の寺、伯父井上眞吉の葬て有る先年母の死亡の時も經文を讀んでもらつた寺で手續をして貰ひ、母を火葬にした焼場で前通りの手續で願升、…又何事も捨て、置かれたとて、私の事です

から、なんとも思ひませぬ、總て皆さんに任せます』

『廢家にしたら遠光寺の墓地は返納して、光澤寺へ父母の石碑を立て、く
れ、監獄の假葬場の様に木標などは、父母のは素より小生のお断はりです』

『手提かばんは今度私の遺骨を入れて汽車にでも乗れば、アノかばんへは母
と私と二度目ですし、それに小生が何れへ行くにも持あるき、トウ／＼警察か
ら監獄までついて來たのだから、因縁なか／＼深いで、一所に埋めてくれ』

◇ 成 石 の 手 紙

細君に送つた手紙の中から左に少し抜書して置く。

『今に成つてからは何とも申しませんが、おとなしく死につくまでのことで
す、僕はかまわんが、兄には氣の毒です、之も皆生れ合せと思はねばしかたが

ない』。

『死刑の宣告は受けたが、まだ／＼死ぬるまではいくらかひまがあるから、
モシ僕に相談があるなら云つて來てもよいが、跡の事はすべて思ふやうにすべ
し、どのやうにしても不足はない』

『必ずしも後家を立てることもありません、よき縁があつたらかたづいてく
れ、イチ子は自分が育てやうと思へば育てやうし、貰ひ人があれば他所へやつ
てもよい』

『外の人の家内や親戚はそれ／＼あひに來るやうですが、そのもとは決し
て面會などには來てはならん、これは堅く言つておく、もし會ひに來ても僕は面
會しません、此手紙を見たからとて正體を失ふ様な事のなきやうにすべし、人
間は一度は必ず死ぬのじやほごに、あまり嘆くことはいらぬ、僕は一足先へ行

つて、極樂で蓮の花の半坐をふみわけて待つて居るから、そのもとも此世では出来るだけ善き事をして、地獄に踏み迷はぬやうに、きをつけるべし、とりあえず死刑になつた事をしらせませす、南無阿彌陀佛』又母に宛てたる其後の葉書には、外に言葉は無くて。只『行く先を海とさだめし清水かな』と、云ふ一句がある。

◇ 森 近 の 手 紙

彼は自ら『近世一元論の學徒』と稱して死生觀を述べて居る。其の舊友小寺に送つた書中に。

『御承知の如く小弟は死なねばならぬ事となつた、其理由の如きは今更申さぬ、……家に産なき小弟は一人の女兒に傳ふるに一部の自傳を以てしたい、固

より人に示すべきものではない、只無意味な石の代りに紙を残したいのです、就ては其脱稿の上、兄の毫も遠慮なき一文を得て併せて保存させたい、此事は兄と南爲吾老と今一人は主義の親友に頼むのである、小弟は近世一元論の學徒であるから、宗教的葬祭は遺族にもして貫はぬ積りである』

其の後弟良平に送つた書中には。

『去りながら生者必滅は天則だ、又今回の事件がなしとて、如何なる災難で死なぬとも限らぬ、一具臭骨頭、煙となつて何地の空に立昇ることも深く惜むに足らぬ、……僕は今から刑の執行迄の間に自傳を書いて一人の娘に傳へ置きたいと思ふ、僕は墓だの、院居士だの、法事だの云ふものは大嫌だ、人の將に死なんとする時に心血を注いで書く一部の回顧録にて事足る』

更に其妻繁子に送つた書中には。

『僕は死の宣告によつて道徳的義務の荷を卸して安樂な眠に入るのだが、御身と菊とは之が爲に生涯の苦痛を受けねばならぬのである、……愛する我妻よ、人間の壽命は測るべからざるものだ、蜂に刺されたり、狂犬に咬まれたりして死ぬ人もある、山路で車から落ちて死ぬ人もある、不運と思ふて諦めて呉れ、……僕も男一匹だ、茲に至つて徒らに慟哭するものではない、少しく御身等の將來を考へて見や、……若し良縁あつて再婚する事が出来れば好都合だが、思はしい事は仲々あるものではない……』

堺が最後に面會した時、森近は

『僕にはモウ將來と云ふものが無くなつた』

と、力を込めて云つて居たが、友人高橋に送つた手紙の中にも斯う書いてある。

『茲に到つて不肖の身には將來なる者無し、固より善の理想あるべき理由なし、唯だ過去を顧みて諸君の友誼を謝するのみ』

森近は此の忽然として將來の消え去つた事に依つて。

『最初は大分困つた』

そうであるが、然し又。

『何アに、自分の一身だけの事はそんなに六かしいものではない。其後二三日考へたればモウ大抵安心がついた。何うせ生物には本能があるのだから、死ぬるまで多少の煩悶があるのは當然だ』
と、極めて在の儘らしく語つて居た。

◇ 新 村 の 手 紙

『捕はれた日より断頭臺上の露と自ら叫んで居た』と云ふ彼は、誠に善く覺悟が出来て居た。吉川に宛てた手紙の中に『君は決して神を拜むなどの力の籠つた御言葉うれしい、私はキリストを神の子として居つたものだが、洗禮を受けたのは三十九年の二月だつた、不思議にもそれ以來迷が醒めてしまつた、私は一度棄てたものを拾ふ様な者では無い、……私はどんな事があつても自分の立場から動き出す様な事は決して無い、安心してくれ玉へ』

斯う云ふ風だから、新村は人の宗教的傾向をも嘲笑して居る。

『社會運動の陣頭に立つ人達が、僅かな事で煩悶したり、宗教に行つたりするのは、悲しく痛ましい次第です』
そして最後に。

『あすは死刑の宣告を聞きに行く日です、之から暫くの間、悠々と讀書し思

索し得るのがうれしい、私は總てを主義によつて批評し判断して居ります、而して極めて平安です、御安心を乞ふ』。

◇新見の手紙

未決中の手紙に。

『牢獄の數ヶ月は予に取りて沈黙考の好時機を與へたので、小生の人生觀も多少の變化なきを得ない、寧ろ今回の災難は小生に取りての良藥にて、新生活に入るの端を與へたのです』

そして宣告後の手紙には。

『誠に意外千萬にて候、熊本評論當時の言論文章が此災を爲したもにて致し方なき運命と明め申候……せめては大言壯話をなりと書いて送らんかと存候

も、中心の真情は此の場に立至りては一ツの偽りをも許さず候、生は今自己の死よりも老母の悲嘆、弟妹の悲痛になやめり、妻の不幸に同情せり』

と云ツて居る。

其の愛人に送つた手紙には。

『然れども是運命なり、明らむる外無之候、小生は立派に明め申候、それにしても僕の様なものを夫として親切を盡し呉れ候事は小生の深く感謝する所に候、……是も何かの悪因縁と御明め被下度候』
とある。

◇奥 宮 の 手 紙

『今回の事、小生には全く不思議なり、然し今は只、宇宙の大靈に此一身を

托するのみ』。

一等を許されて無期になつた十二名も、永い獄中生活に大半は牢死した。

× × × × ×

死刑が執行されてから、親族や友人がなき骸を引取に出掛けた。内山愚童の兄が『弟の死骸かどうか棺桶の蓋を取つて見せてくれ』と我張つたり、日清戦争の時、李鴻章を狙撃し、永らく北海道の集治監に居た小山六之助は『俺は廿年前から命を棄て居るんだぞ』と昂奮して居た。

當時四谷の左門町に居た堺の家の椽側には、幸徳外二名のなき骸を入れた棺桶が三ツ並んだ、浪人は此柩を見た瞬間、他人に口外出来ぬやうな恐しいことを考へた、此間にも堺は例の雨降り上りの天氣のやうな、晴やかな聲でカラ／＼と笑つた、彼の面目は茲にある、且て平民新聞の廢刊號に皆が血の出るや

うな文を書いて居る時、獨り塚は、『焼野の跡へは更に新しい芽が出る、平民新聞の廢刊は寧ろ祝すべしだ』と言つたやうなことを書いて居た、世の中には不真面目なことを真面目らしくやる者がある、又真面目なことを不真面目なやうにやる者もある、科學者の如く理性的な彼の半面には、詩人の如く胸中深く涙を藏して居る、人の泣く時に笑ふことは、高い代價は拂はねば出來ぬ腹藝だ、彼が日本一のユウモリストを以つて任ずる本領も茲にあるだらうと思ふ。

樂天的な塚にも、センチメンタルな逸話がある、彼が赤旗事件で千葉の監獄に居た時は、真柄嬢は未だ五つか六つの振分髪の可愛い小供であつた、爲子夫人が面會に行つた時、泣くと困ると思つて自分のシゴキを解いてその端を小供に持たし、面會所の戸を少し開けて置いた、これを戸のスキ間から見た彼は場所が場所だけに如何にも憐れに感じられ、監房へ歸へつてから泣いたと言ふことだ。

反動の嵐 第三編

◇孤城落日

大杉がその著『正義を求むる心』の中に『雨後の竹の子のやうに族出した社會運動や労働運動者は、近く來る反動期の嵐の爲に吹き飛んで仕舞だらう』と云つて居るやうに、何時でも運動が盛になると餘り研究も出來て居らず、確固たる信念のなさそうな人かウンと出て來る。中には資本家や御役人連までが、御調子に乗り寄附金をするやら、一角理解のありさうなことを云つたりするが、近頃のやうに下火になり出すと『そんなことは空想だヨ』とケロンとした顔をして居る。

筆者が入獄した大正八年頃には、米騒動の餘波を受けて、だいぶ盛になりか

けて居た、その頃聞いたこともないやうな人が、二年後に出獄した時は天下の名士になつて居た、日本の社會運動がどんな人々に依つて、どんな道を歩いて來たかも知らぬやうな若い人が、先輩をつかまえて『そんな名も聞いたことがあるなア』と云つたやうな高調子、何にしても一時はすばらしい勢だつたが、昨年の震災以來、吹く秋風と共に木の葉の如く散つて仕舞つた。

第一期時代の連中でも景氣のいゝ時は、茶話會をやつても百人や百五十人位は集つたことはあるが、赤旗事件、大逆事件とつゞく嵐に吹き飛され、僅に残つた十人足らずの人々も、雑誌は出せるじやなし、演説は尙更出來ず、つかれた身體を引づりながら、迫害苦、生活苦にあえいで居た、それも今と違つて主義そのものを知る人は少なく、社會主義者と泥棒を一緒にして居た頃だから堪らない、堺老でさへ賣文社とか浮世顧問とかをやつて忍んで居た位だから、そ

の他の同志の生活状態などを思ひ出すだけでもイヤな氣持になる、古い主義者の殆んど全部が健康を害して居るのも、永い間の獄中生活や營養不良の爲である云つてもいゝ。

今の若い元氣のいゝ人々から見たら、老人連のやることは、生ヌルくもあり嫌足らぬであらう、然し龜の甲が堅く、兎の後足の長いのも、敵の攻撃を防ぐ爲で、是迄の先輩の行爲は決して彼等の本質ではなく、永い間の悲惨な生活がそう云ふ風にねじまげたのである。且て木下が逃避した時、堺がこんなことを書いて居た。

『社會運動を止める人は止める方が都合がいゝから止めるのであるやうに、何時までも運動をつゞけて居るのも偉いと云ふよりは、そうして居るより仕方がないと云つた方がいゝ、唯止めた者が自分の立場を辯護する爲に、残つて居る

ものを悪く云ふのは間違つて居る』と云つたことがある。

今度の反動期は多くの労働團體もあり、をぼろげながら思想も普遍的になつて居るから、以前のやうに長くもなからうし、孤城落日と云つたやうなヒドイことにはなるまい、また水攻め火攻めの試練を受けぬ若い人々には可成苦しいことだらうが、その變り來るべき社會運動の中堅が掘り出される譯だ。これまでの經驗から見ると聲涙共に下ると云つたやうな昂奮性の人は永續せないやうだ、労働運動や社會運動は經濟であり科學であつて、詩でもなければ歌でもない(詩や歌を馬鹿にする意味ではない)イクラ學問があつても、熱情があつても永續せなければ、社會改造の大業が成り立たないのだ。

逃避した有名な人では木下尚江、西川光二郎、山口義三がある、最も山口は死ぬ、一二年前から、堺がやつて居た雑誌『新社會』に『階級闘争史』を書い

たり、浪人が入獄する時の送別會に來て居たりしたが、どうした譯か高島が怒つて牛鍋など投げたりした。

彼も出獄後美しい妻君を迎へてから變になり『社會主義運動などをして貧乏したり監獄へ行つたりする奴は大馬鹿者だ』と罵つたりしたが、若い時は熱狂的革命兒であつた、悲惨な女工の生活状態などを話す時は、ボロ／＼涙をこぼしたり、小田頼造と眞赤に塗つた上へ社會主義と書いた箱車を引いて、パンフレットを賣りながら東海道を傳道旅行をしたことがある、木下は小説『火の柱』や『良人の自白』で、西川は『改革者の心情』で、當時の若い主義者の血を湧したものだ。

◇藝者の家宅捜査

大逆事件の時は、全國一齊に主義者の家宅捜査をやつた、中にも大石録亭の居た紀州の新宮では最も大仕掛に行はれた、それだけ奇談怪説が多い。

西村の所へ、警部が捜査を五六人連れて来て、天井裏床下まで細かに調べたが、一番閉口したのは罐詰の説明だつたそうだが、單に繪ノ具だと云つても捜査は承知しない、左も恐ろしい劇薬か、爆發薬かのやうに、ピク／＼しながら、『何と云ふ名で、どうするものか』と聞く、面倒だが繪具は一々捻り出して色を見せてやつたが、困つたのは罐詰だ、マルカリンだと云つても、エツキスだと云つても、『中を開けて見ろ』と云ふ、そう一々開けたんちや腐敗するから、レットルを讀んで説明したり、そのレットルに小さい牛の繪が描いてあれば、内容は牛肉だと云ふ様に承認さしたりしたが、たゞ一つ滑稽なことは、或宿屋を捜索した時西國順禮の道者が宿つた折、細長い袋に入れた麥の粉を置忘れて

行つた、雨にでも濡れたのか變な匂ひがするので、女中が袋戸棚の中へ投げ込んで置いた、それが發酵して妙な色になつて居たものだから、とう／＼それを危険な薬と認めて押收して行つた。

どう云ふ關係からか田邊で有名な藝者か捜索をされた、まさか獨り寢に臨検でもあるまいと藝者君オチャツイテ居ると、鏡臺と云はず、筆筒と云はず、片端から調べ初めた、所が筆筒の横に小さい桐の箱が……それへ捜査が手を掛けるど、藝者クン『キャッ！』と叫んで、その桐の箱を引奪つて確と抱きしめた、『それ！』とばかり捜査がその箱を撈ぎ取らうとする、『こればかりは、そんなことがあつても見せられません』と其の箱を抱へ込んで放さない、そう云ふ他人に見せられないものが目的で踏込んだ警官だから、うん然うかと云ふ譯はない、強ひてそれを見やうとする。

『そんなら、検事さんだけなら見て貰ひます』
と云つたので。

『よし／＼、そんなら僕一人で見よう』

『巡査はん達に次の室へ行つて、貰ひませう、これは、わたいが大事の／＼
のものだすよつて』

『では別室で見せて貰はう』

こんな事で、検事と藝者とが別室へ閉ぢこもつた。

◇検事逃げ出す

所がそのコントラストが面白い、藝者と云ふのは土地でも稀な頗るの美人、検事と云ふのは謹嚴な澁面作つた男、其の二人が對座したまでは宜つたが、藝者

は町の財産家の息子である醫者を想つて居たが、醫者も藝者を落籍させうとまで愛して居た、所が家庭の都合で大阪の方へ行つて親の撰んだ女と結婚する事になり、藝者から貰つた何百通と云ふ手紙を小包にして『これまでの縁と諦めてくれ、綺麗サツパリと別れやう、此手紙は今まで大事にしてあつたのだが、焼くのも心苦しい、と云つて持つて居たんでは尙更悲しい、だから思ひ切つてお返しする』と云ふ意味の手紙を添へて返して來た、藝者は二三日泣いて／＼泣き通したそうだが、面白いことを考へたものだ。その何百と云ふ手紙をチャント整理して、自分の出した手紙と其返事とつまり往信復信を一々綴合して生た小説をこしらえた、そして

『わたいとあの人とは、もう此世で連添ふ事が出來んのやよつて、せめて手紙だけなりと、夫婦にしてやらう』ツて、比翼状を作つた、それを大事に桐の

箱へ入れて、毎日毎晩暇さえあれば夫れを讀んでは泣いて居た。

對座した検事に、自分と色男との關係をオロ／＼聲で物語り、いよ／＼本文に取かゝつたが、検事に手も觸れさせないで『一ふで染めしまいらせ候、さてあなたと私とがこうなつたのも、元はと云へば……』と一々讀み初めたので、検事殿も大いにアテられ、

『もういゝ解つた／＼』と云つて逃げを張つたが、今度は藝者の方で却々承知しない。

『ね検事さん、あたいがこう云つてやつたのに、あの人はこない云ふて來やはるんだもの、そりや男はんの方が無理だッしやらう、』

と云ふ調子で、検事は散々油を絞られて、頭を掻きながら歸つたそうだ。

◇兵器廠を襲ふ

今は印刷屋で、數十名の職工を使つてオサまり返つて居る矢田得三も、あれで若い時分には随分元氣なもので、謂ゆる一騎當千の士を以つて自づから任じてゐた。

何んでも幸徳事件の少し前に、何者かが門司の兵器廠を襲ひ、當時あたかも勃發してゐた支那の革命を目當に、武器を持ち出して賣り附ける計畫を立てた。それは勿論、それを賣つてシヨたま儲け運動資金を拵えるといふ算段であつたが、頗る無茶な無鐵砲な大膽きわまる計畫であつた。

或る夜、私かに兵器廠に忍び込み、まんまと看視の眼を盗んで車に一と山、武器を積み込んで持ち出した者があつたそうだ、ところがうまく持ち出したは

よいが、直ちに其筋の発見する所となつたので、折角持出した武器を、惜しくも火をつけて焼いてしまつた、そうして、それを知つて居る彼れ等は、何知らぬ顔をして當時黒瀬のやつてゐた、新宿驛の賣店に寄り、いろんな打合せに時間の經つのを忘れてゐた、が、突然數名の刑事が警視廳からやつて來た。所が折悪しくも黒瀬はそこに數個の彈藥を持つてゐた。二人はハッと思つたが、もうどうにも仕様がなない。言はるゝまゝに其の彈藥を持つて刑事の後について警視廳に出かけた。

すると、今の今まで元氣であつた黒瀬の顔が途中に青くなつたので、流石の矢田も氣が氣でなかつたが、やがて警視廳に着いた時、例の彈藥を途中で黒瀬が捨て、しまつた事が分つたのでホッと一息ついた。しかし警視廳ではそれで承知する筈はなかつた。早速刑事數名を向けて黒瀬の下宿をスツカリ

家宅搜索した。所がこれは又た意外なことには、下宿のえん側の床下から通貨偽造の機械とか、発見されたのだ。其の機械は果して彼等のものであつたかどうか。よし彼等のものであつたにしても、彼等は何んの目的でそんなものを持つてゐたかに就いては、勿論こゝで彼是いふ限りでないが、兎に角さうなつたからには、二人はいやおうなしに市ヶ谷の未決監に送られた。

丁度、例の幸徳事件が勃發して、數十名の同志が在監中であつた。當時世間では、此の事件に就いて上下の階級を通じて、随分いろんな問題を起したが、監獄でも亦、被告人や囚人仲間の間で可なりウワサの種となつた。従つて、當時未だ若い血氣にはやり、焼くが如き熱情を抱いた、矢田にとつては、ジツとして居られる筈はなかつた。彼れは朝な夕な種々の方法を考へて絶えず同志の消息に注意をはらつてゐた。

が、突然、或る朝、にわかには外が騒々しいので、何事か起つたらうかと、ふと食口から覗いてみると、幸徳以下幾人かの被告がズラリと並んで居る。其の様は、全るで赤旗事件當時の大杉榮が、數十名の官憲を前に憤然として無政府主義萬歳を絶叫しながら、次から次へと向つて来る査公を投げつけた、あの猛烈な意氣揚々たる態度にも似た、頗る元氣のある豪快な、而かも憤然たる態度であつた。

其の日、彼等は公判？に行つたのであつた。其の後武田九平などは、多分無罪で出る積りだつたのか、言渡の日限り辨當の購求すら止めて仕まつた。今にして考へると、彼等があつて元氣であつたのも、殆んど大半が無罪で出られるとのみ思つてゐたからであらうと云はれて居る。

だが、事件は期待にはづれ、被告の全部は有罪となつた。判決の日は、何ん

となく、彼等の果敢ない運命を、暗示するが如く空は、一面に雲つて今にも雪が降らうとしてゐた。

判決の翌日ドンヨリした、空の下で運動に出掛た。

『殆んど小説だね』『茶話しもウツカリ出来んよ』と大石は云つて居た。

『モ一何んにも云ふ事はない。夢を見て人を斬つた奴があるそうだ。が丁度それだね』と武田九平があきらめて居た。

『此所に居る内は、毎日三浦アー』と呼んで呉れ玉へ。『矢田アーと呼ぶから』と三浦保太郎は云つた。が、ついに一度も聞かなかつた。淋しかつたんだナア、無理のない事だ。アノ若いのに。

◇俺は首だ！

其の翌日は夜半から降り出した雪は、バサ／＼、鐵窓の鐵棒に吹きつけて居る、突然、そこかしこの監房で掃除の音が聞へる、ハット思つた、その時心臓の音が激しくなつた、そして直ぐ、北の隅に有る絞首臺の方を、窓から眺めたが、雪が顔を打つのみだ、シンとした市ヶ谷の森は、白くつゝまれて行く。終日を不安の内に夜に入つた。夜に入つてマス／＼降り續けた雪は、更らにひとしほ寂漠の感を増して、獨房にあつて、一種異様な不安の念にかられながら、夜を明かした。

其の翌日は、前日にひきかへ、空は晴れて頗るよい天氣だつたので、毎日ある二十分ばかりの運動を楽しみに、獨り淋しく時間の經つのを待つてゐた、と遂に其の日は、天氣のよいに運動がなかつた。

『ハテ、ヤツバリやられるのではないか?』と更らに一層の不安にかられ、午

後の入浴を責めての頼りに、いくらかの期待をもつて、待ちに待つてゐた。すると、『入浴!』と呼ばれたので、飛び出る様にして監房を出て、急いで浴場に行つた。そこに大石誠之助のスリッパがあつたので、一と先づ安心して、更らにあたりを見廻はしながら、着物をぬいて居ると、丁度、その横側の湯ぶねから古川力作が出て來た。のでハツと思つたが、マアよかつたと思ひながら、まさか。

『まだ生きてゐたのか』と聞くわけにも行かず、ちよつと挨拶に困つた。やがて入浴も済んで、出ようとしてゐると新村忠雄が、元氣よく這入つて來たので、思はず手を握り。

『どうなつたんだい』と尋ねたら。

『半分は助つて、北海道に行くが、僕はこれだ、これだ』と首をたゝいて見

せ『皆んな大變元氣だつたと傳へて呉れ』。これには何んと答へてよいやら、途方に暮れて、實に、異様な悲痛な感に打たれた。

死刑執行の當日は、朝から獄内がザワ／＼するし、外に張番をして居た監守が。

『階上！窓からのぞいてはいけない！』と怒鳴つて居た、(その日幸徳や大石始め十一人が執行され、一人残つた管野が翌日朝早く執行された)何心なく窓から顔を出すと、はるか向に見へる絞首臺へ急ぐ管野の姿がチラリと見えたその時！振り返つた顔が眞青だつた、驚いて、足臺にして居た便器をひつくりかえして、室中クッだらけにして困つたそうだ。

一説には、赤羽一が秘密出版を携帯して、行衛不明になつたので、赤羽の郷里である信州は、非常な詮議であつた、其の時、宮下が山中へ這入つた、あと

を尾行したのが、あの大逆事件の發覺の糸口であつたそうだ、山中へ這入つた宮下が、或洞穴で姿を消した、尾行のポリが、テツキリ出版物がかくしてあるのだと思ひあとで調べると、爆彈が出て大騒ぎになつて、直ぐ宮下が拘引された、其頃湯河原に居た、秋水の所へ出掛た新村が、歸郷した所を停車場で、引ばられ、事件は益々大きくなつたとも云ふ。

◇そら來た騒ぎ

吉川世民の郷里の老母が、『お前が來るとイツモ後から警察の人が來て、色々のことを聞いて手帖につけて歸るが、お前は一體東京で何をして居るのです』と云ふ、そこで世民が社會主義の話をして聞かせると、『そんない、ことなら警察の人が來る譯はない、その奥の手があるだらう』と云つてキカない、これに

は吉川も閉口したと見え、『共産黨事件の時の豫審判事より始末が悪い』とコボしたことがある、こうした問題は、こんな運動に關係した人は、大なり小なり體驗して居る筈だ。

確か大逆事件の起つた前の年だと思ふが、片山と鈴木と浪人とが地方遊説に出掛けたことがある、汽車では面白くないと云ふので三人は横濱から汽船に乗り、伊勢の四日市に上陸した、その翌晩そこだけは無事に演説は出来たが、それから京都へ行つても奈良へ行つても、大阪や神戸へ行つても、行先き先を電報や電話で會場を妨害して、どうしても演説をやらせない、尾行と喧嘩しながら浪人の郷里石川縣へ歸つた、巡查のつくやうな者は事の善惡を問はず、悪人とキメて居る田舎へ尾行が五人も六人もクツツイて来たから堪らない、何でも中田の話に依ると少し大きな聲でもする者があると『シッター、シッター』と制し

たそうだ。

これは後で聞いたことだが、その晩村の區長の家に宿つて居た巡查が、夜中に猫が喧嘩をして雨戸に飛つた物音に驚き、『そりや来た!!』とハネ起きた、釣つてあつたランプが落ちる、子供が泣き出す、大變な騒ぎをしたと云ふことである。

久しぶりで愛兒が歸つたので喜ぶべかりし父母は——笑は涙と變つた。極度に昂奮した浪人は、奥の間にあつた屏風に『主義に忠實ならんとすれば……』と書き出したのを見て居た片山は、『君、豫言者故郷に入れられずだ、歸らう歸らう』三人はドロボー猫のやうに、暗にまぎれて村を出た。

それから村へ歸る度毎に區長の玄關に釣てある太鼓を打つ、それは田甫へ働きに出て居る村の小使を呼ぶのだ、その小使が浪人の歸つたことを巡查派出所

へ報告する、今度は巡査が自轉車で一里もある松任の警察まで警戒の打合に出掛けると云ふ馬鹿騒をしたものだ。

◇名刺の逆用

大逆事件の時、信州からワザ／＼傍聴に出掛けて来た山崎今朝彌が、裁判所で新聞記者に『法學博士、醫學博士、哲學博士、其他色々、英獨佛羅旬語に通ず、財産合計百萬弗有り、米國伯爵、未婚者』と云ふ名刺を出したと云ふことが、當時の萬朝報に出て居たことがある、浪人は更に輪をかけ『官憲の注意人物△電車燒打事件嫌疑者△増税反對國民大會發起人△電車同盟罷工煽動嫌疑者△師團増設反對國民大會張本人△新聞紙法違反外科七犯△爆彈事件嫌疑者△入獄五回△十年間探偵に尾行せらる(所謂大臣待遇)△檢束拘留數知れず』と

云ふハガキ大の名刺を印刷して、官憲の迫害に對抗した、最も之にはブル共の何公爵とか勳何等とか云ふ肩書に對する皮肉もあつた。

桂内閣時代は日本に於ける探偵政治の絶頂と云はれた位だから、従つて主義者に對する取締も峻嚴を極めたものだ、主義者が會社や商店へ廣告や講讀の勸誘に行く、後からすぐ尾行が行つて『今君の所へ来た男は社會主義者だとかこの間監獄から出たばかりの札附だとか、どんな話をしたとか、あんな者のやつて居る雑誌や新聞に廣告を出してはいかん』とか言つて盛に妨害したものだ先方ではタゞの人間だと思つて色々話した所が、その男が尾行附の危険人物と聞いて、驚吃仰天、次からは訪問しても却々面會せず、あつても廣告や購讀を斷ると云ふ有様で、何とも仕方がない。警察がなんと言つても平氣で逢つたのは後藤新平と中橋徳五郎位のものである。そこで例の凄いな刺を出す、最初

は恐しい男だと思ふが、ダン／＼話して居る内に本人の善良さが判つて來ると今度はアベコベに

『恐しいカタ書附だが、話して見るといゝ人ですよ、警察の方で誤解して居るんでせう』と却つて辯解してくれる、人間と云ふ者は變な者で白狀して仕舞へば何でもないことでも後から知れると不愉快に思ふ。此の名刺が以外に成功したので、それ以來主義者間に斯うした名刺が流行し出した。しまいには異面目な片山までが『社會主義者、片山潜』と云ふ名刺を持ち歩いて居た。奇抜と言ふよりは意外に出たのは江川と言ふ男が、標札大の板に自分の名をペンキで書きその横へ『御覽の上は御返し被下度候』とやつた。此板名刺を受附へ出すと、取次の給仕先生、例の板を抱いたまゝ笑ひコケて居た。

◇一對の喜劇

日比谷のヤマカン横丁におでんやをして居る岩崎善右衛門が、水戸の田舎から上京したばかり、例の尻り上りのアクセントで水戸辯を振り廻して居た頃、喰に困つて人力車夫になつた、或日のこと相棒と二人で自由黨の壯士を乗せて麴町から本郷、下谷から神田と一日中引張り廻し、夕方錦町の『更科』と云ふそばやへ壯士先生が車をつけた、所がそれと入り違ひにそばやの主人が出て來て、

『お前さん達は、あの人を知つて居るのかどうか知らぬが、あれは自由黨の壯士をして居たもので、あんな者を何時まで乗せて居ても百にもならぬ』と注意し、そばを喰はした上に、一人に十五錢づゝくれたので、二人は客を置き放し

にして返つた。話が變つて其後岩崎が人力車の丁場を持つやうになり、例の壯士が落魄して引子に來た、然し彼は昔日の罪を問はず親切に色々世話し、人力車や袴天を貸してやつた、慣れぬ仕事の悲しさその晩反則をして京橋署へ拘留された、之を受出しに行つた岩崎と例の壯士が歸りに銀座通りを歩きながら。
『空車を引いて居てもつまらぬから、乗つて下さい』と岩崎を乗せた壯士先生
今昔の感に堪へぬものゝ如く

『且つてはだゝ乗りした人を、たゞ乗せて引く、人間萬事塞翁が馬』と嘆息したが、此意味が車上の人には通せず、

『君それは何のことだい』と反問され、壯士君、諄々として説明したと云ふ、曾我廼家モドキの喜劇がある。

これと似たやうな一對の喜劇がある、奇言奇行を以つて有名な、山崎米伯が

まだ信州に居た頃、尾行を撤くつもりで、上諏訪の停車場へ飛込んで來た、恰度汽車がブラットホームを離れやうとして居た所なので、切符も買はず改札所を飛越へて、一番最後の車について居る丸い玉に飛つて、ブラ下つたものだ驚いたのは驛長だ、ベルを鳴らす、巡査が來る、汽車が止ると云ふ騒ぎ、事面倒なりと見た今朝彌クン早速飛降り裏山へ逃げ込んだそうだ。

◇あゝ佐渡丸

米國伯爵、世界各國博士山崎今朝彌が、信州の山の中の化物屋敷で、青森産のよく食する妻クンと辯護士の安賣をやつて居ると言ふことは聞いて居たが、まだ正體を見たことがない、それがどうした風の吹き廻しか東京の真中、銀座に現れたと聞いたので早速訪問した。

案内を乞ふと炭焼見たやうな男が出て来た、

『山崎さんは在宅か?』と聞く

『俺が山崎だ』と言ふ、之が米國伯爵の正體とは、浪人もチョット面喰つた。

確かその年の暮であつたと思ふが、東京市電の車掌運轉手が年末から正月へかけてストライキをやつた、今日のやうに組合もなく、何等の訓練もないにしては、如何にも組織的に敏活に行動したのには當局も舌を卷いた位だ。

それから二週程経つてから、同盟罷工を煽動したと言ふので、片山、山崎、浪人と外二名の者が検事局へ召喚されて取調を受けた、當時浪人の事務所は伯爵家の屋敷内にあつたが、家宅搜索の際二階の大テールブルの引出が一つどうしても開かない、此中にはキット有力な證據があるに、らんだ判検事は、『テールブルの引出をコワしてもいいか』と言ふから

『よろしい』と言つた、二名の刑事が一生懸命になつてタ、キコワしたら、中から馬のクソのついた古下駄が片方出て来たと言ふ珍談がある。

出獄後片山は勤先の雑誌社からは首になる、官憲の迫害がヒドイので一時アメリカへ亡命せうと言ふことになり、妻子を郷里へ歸し、同志の合宿所見たやうになつて居た三崎町の家と田端の住宅を賣り拂つた、堺は同志の人々を、筆者は知人や友人を訪ねて旅費をあつめたが、今と違つて皆が極度に貧乏をして居た時だからイクラも出来なかつた。

出發の日、同志の面々は彼を新橋まで見送り、浪人と彼の弟(出家して居る人)が横濱まで見送つた、愈々佐渡丸が棧橋を離れる時、此老革命家の顔を再び見ることが出来ぬやうな氣がした、甲板に立つた片山の影が見えなくなる迄ハンカチを振つて別を惜んだ。

◇武勇談二つ

今は故人になつたがツイ近頃まで川越の町長をして居た大塚善太郎をアメリカで、横腹をエグつたとかエグらないとか云ふ刑事問題を起したり、謄寫版刷の不穩文書を日本の同志に郵送したとかせぬとか云つて張本人に疑せられたりして、ヒドク日本の官憲の恐怖の的になつて居た岩佐作太郎が、大正六年の夏漂然として歸朝した。

何時もニコ／＼した五尺足らずの小男、どう見ても殺人未遂の刑事被告人や不穩文書の密輸者には見えない、彼は歸朝後山崎伯爵家の一子堅吉クンの子守役をして居た、或時は日比谷公園に、或時は愛宕山に、無邪氣な子供と他愛もなく遊んで歩いて居る後から、コワイオチサンが二人もついて歩いて居るから

全く御苦勞と申すの外はない。

岩佐はよく『己は無能だ、無能だ』と云つて居たが、どうして本人の云ふやうに無能所ではない大杉死後はアナ系の領袖株だ、當時彼は何から思ひついたのか、

『己は靴みがきをせうと思ふ』と云ひ出した。

『靴をみが、すやうな人は何れもブルだ、無政府主義者に足をつかまれちや、何をされるか判らぬからナ』と米伯は笑つて居たが、その話はそれ限りになつて仕舞つた。

その後神田の佛教會館で、反動團體と無政府主義者との立會演説會が開かれた、その晩岩佐も出席したが。反對派の壯士が水も溜らぬやうな長いのをズラリと抜いて、彼の鼻先へ突出した、此小男驚くと思ひの外、磁磐の如く動かす

『ナカ／＼立派な物ですなア、拜見致しませう』と高飛車に出られ、壯士先生却つてダヂ／＼としたそうだ。彼も近頃女子大生との間に浮名を流して居る。

もう一つの武勇談は、横須賀要塞砲兵隊へ入營した福田狂二が、教練中に、教官に鐵砲を投げつけたり、週番士官を殴つたりしたので、何度も營倉へブチ込まれた、軍隊の壓迫に反抗心を起した彼は、罰せられる毎に愈反抗し、遂には營倉内の壁に不穩の文字を書きつけて脱營した。

その頃本郷の切通しに二階借をしてた吉川の所へやつて來た。

『どうした』と聞いたら

『脱營したんだ』と云ふ、これには吉川も驚いたが、敢行した後では何ともしかたがない、他によい隠場もないので二三日居ることにした、彼は大膽にも、あの大きな男が、小さな吉川のドラテラをツンツルテンに着て、すぐ交番のそば

にある煙草屋へタバコを買に行つたりして、ヒヤ／＼さしたものだ。

福田は郷里から金を取り寄せて、新橋から二等車に乗り込み、警戒線を突破して上海へ亡命した、上海の宿屋で捕縛に來た憲兵に火鉢を投げて、屋根から逃げ延だが、荷物を取りに來た所を、待ち伏せて居た憲兵に取押へられた。

そのことが新聞に出たので彼が内地へ護送される時船の中で乗り合せた客が、『脱營して逃亡した社會主義者がつかまつたがあんなのは死刑になるでせうネ』と話して居たのを聞いた時は、まさかと思つたがウス氣味が悪かつたそうだ。

渦 卷 く 焰 Ⅱ 第 四 編 Ⅱ

◇主義者の生活

自由黨史を見ると當時の志士が運動費に困つて強盗までしたことが書いてあるが、社會主義者も資本制度の世の中に資本家に反抗して主義の宣傳をやらうと云ふのだから却々容易ではない、ブルの中には共鳴して居る者もないではないが、それも人目があるので充分の厚意を持つことは出来ない、元來人として自分の土臺石を掘りに來るやうな者に對していゝ感じの起らう筈がない、従つて主義者連の生活は二重三重にならざるを得ない譯だ。進んで敵の砲壘にぶつかるか、退いて逃避するか、上手に鋭鋒をさけて巧妙な運動をするより外ない

第一期時代の人で今日尙戦線にある人は、一番最後の手段によつて居る人が多
いやうだ。

資本制度を呪ふ社會主義者だとして生存競争の劣敗者ではない、堺利彦に會つた事のある星製薬の星一は『堺は主義者でなければ立派に大會社の重役位にはなれる男だ』と云つたさうだ、多くの主義者の中には、先天的の正直者があつて主義者にならなくても貧乏するやうな人もないではないが、資本主義に順應して生て行くことさへ容易でない現在の社會に於て、親類友人等よりも絶交同様の身でありながら、一方の領袖として頭角を現はして居る人々は、最初から精力の全部を生活に投じたならば、何百萬何千萬の財産は出来ないまでも、彼等が今日嘗めて居る様な、生活上の不安を感じなくてもスンなのである。

今の所では主義者として生活するのに一番非難の少ないのは原稿を賣ること

である。所が之とても買った雑誌社や本屋は實質以上、針小棒大な廣告をして盛に讀者を釣る、一圓位で出来る本を表装や紙質を立派にして三圓も取る、要するに一種の欺偽をやるのであるから、その本屋や雑誌社から原稿代や印税を貰らへば、泥棒の分前に預つたことになる。資本制度の世の中では何をしたらからとて二重生活でないものはない、最も眞面目だと思はれて居る筋肉労働でさえ資本家の餘剩價值をつくると言ふ點に於て撞着があるのだ、それが何の矛盾も感せず生活が出来る位なら社會主義はいらない。

敵方は固より仲間の中にさい『あいつは社會主義を喰物にする』と云ふ者がある。社會主義を喰物にしてナゼ悪いのだ、現在の國家組織の強味は、軍隊も、警察も一般の官吏も飯が喰へると云ふ所にある『他に職業を求めて傍ら運動する』そんな花見氣分で此命がけの大運動が出来ると思ふか、どんな偉い人間で

も八分までは經濟上の支配を受ける。その人の仕事が運動に縁が遠ければ遠いだけ戦線から離れて行くことになる。即ち唯物史觀の哲學はこゝから生れたのだ。著書や雑誌を出版し組合を造り演説をやつて大に喰物にせよ、一人でも多く運動で飯を喰ふものが殖えることに依つて、社會主義が益々發達するのだ。社會運動は階級闘争の一本鎗——宗教運動でないから古い道德に囚はれてはならぬ。労働組合を作つて會費を取つたり機關雑誌を發行して廣告を取たりして生活をするのが労働ブローカーなら社會運動者や労働運動者以外の新聞や雑誌や政治屋や實業屋は愛國ブローカーだ。彼等は如何にも眞面目らしく忠君愛國を看板にして金儲をして居るドラックである、何が労働ブローカーであり何が愛國ブローカーであるかは見やう見やうであり、何れがよいか悪いかも立場立場に依つて考が異ふ。資本家若くはその奴隷新聞や雑誌が労働ブローカー呼ばりを

するのは、目クソか鼻クソを罵るの類だ、天下に此位コツケイなことはあるまい、社会運動者や労働運動者が皆労働者になつて、資本家の剩餘價値を造る爲にクタク／＼につかれ、組合も出來ず機關紙も發行されず演説一つ出來なかつたら、彼等にとつて好都合であらう。

◇革命歌の由來

九段のユニバサリストで社会主義の夏季講習會が開かれた時、栃木の田舎から手織木綿のゴツ／＼の衣服を着て出て來た一青年がある、浪人は計らずも此男と交誼になり、神田のそばやでモリをバクツキながら無政府主義と社会主義とこのことで、大議論を始め同席のお客を面喰はせたことがある。此男こそ『あゝ〇〇は近づけり』と云ふ革命歌の作者築比地仲助である。

社会主義の歌と言へば、高濱長江の『富の鎖を解き捨て、自由の國に入るは今』と言ふのであつたが、社会黨の分派後、刑死した森近運平が大阪で日本平民新聞を發行して居た時、懸賞募集をしたことがある、その一等に當選したのが例の革命歌で、今は一ぱい氣嫌で一寸カフェエデさんでも、拘留の三日位は間違はないと言ふ、ドエライものになつたが、主義者中では作者の誰であるかを知つて居る人は少ない。

その後、築比地は永島弘の秘書をして、鴻巣銀行に居た頃、

『君の作つた革命歌も、づい分有名になつたものだな』と言つたら、

『そんなことを餘り人に言はぬやうにしてくれ給へ、私が作者だなんて言ふ事が判ると、若い主義者達は幻滅の悲哀を感じるから』と言つて居たが、彼は實業界へくら替したので、當時の境遇上都合が悪かつたらしい。

彼の話に依るとあの歌の大部分は、今は故人である彼の弟が作ったので、まづい所を彼が訂正したのだと言ふ何でも兄弟が畑でそら豆をちぎり乍ら、

『兄さんこゝは斯うしたらどうだらう』

『そこはこうするといふなア』と言つたやうな調子で出来上つたものだと言ふが、官憲の神経を尖らして居る革命歌が、風薫る田園で、十九や廿歳の青年に依つて作られるかと思ふと、特別な趣を感じる。

作者は不明だが、メーデーの歌として廣く知られて居るのは、『櫻は散りて貴人等が、榮華の夢のさめし時』である。加藤一夫の作で高尾の葬式の時、一般會葬者に悲壯な感を與へた『祭壇のなきがらは、恨を吞んで眠る』と言ふ弔歌も、若い労働運動家や社會運動家の間に、可成流行したものだ。

◇問題の刀

永らく郷里岡山に雄伏して居た山川均が、大正五年の春出京した、彼は東京までの切符を買つたが、夜中の二時頃突然神戸へ下車した、別段町へ用事のあつた様子もなく、一二等待合室の長椅子にグッスリと寝込んで仕舞つた、二時、三時、四時と経つても起やうともせぬ、漸く八時頃になつてから海岸通りへ向つて歩き出した、こゝまでは無事だつたが、今度は波止場から船に乗つて、沖合はるかに碇泊して居る××丸に乗り込んだので、尾行先生驚いた、(此尾行は元憲兵をして居た男で、今は大丸呉服店に監視見たやうなことをして居る、米騒動の時筆者に尾行したので此話を聞いた)、尾行も船に乗つて後から追かけた、しばらくすると山川が、風呂敷に包んだ大きな大刀を持つて出て來たので

尾行は愈々驚いた、山川はその大刀をかゝへながら停車場さして急いだ、尾行も見失はぬやうにつけて行つた、神戸から乗車した山川は大阪で降り、人力車で天満橋まで来て、今度は京阪電車に飛び乗つた、尾行先生トモ堪らぬと思つたものか、山川のソバへ飛んで来て『私は神戸から来た尾行ですが、あなたは是から何處へ御出になります』と、かぶとを脱いだ。

その後賣文社で山川に逢つた時聞いたら、當時海外に居た森田有秋から、×丸の船長が頼まれて来たものを取りに行つたのだと笑つて居たが、警視廳では笑つても居られず、色々調査したが理由が不明らない、遂に山川を呼出して始末書まで取つたと云ふコツケイ談がある。

山川には外に面白い結婚ロマンスがある、以前堺の玄關番をして居た松浦長治が、或日電車で山川と一しやうになり、どうした行が、りからか菊榮夫人

をメチャ／＼にコキ下したものだ、山川は例の謹嚴な態度で之を謹聽して居たが、肉皮にもその翌日兩人連名の結婚通知狀が来たのは、松浦長治、長嘆久しうしたと云ふことである。

◇戀の三角事件

埼玉縣の熊谷で演説をした翌朝、宿屋の女中が持て来た新聞を見ると、三面の真中頃に初號活字の三段ヌキで『社會主義者大杉榮刺殺さる、情婦神近市子の爲に』と云ふみだしで、殆んど半頁ばかりが、こんな記事でうすめられて居る、息をもつかず読み終つた浪人は、『ほんとうに死んだらうか?』と思はず聲を出した。次に四五日前に會つた大杉の顔を思ひ出した。其日、東京へ歸つたので友人に問合せたら『喉をやられたが命は大丈夫だ』と云ふことであつた。

此戀愛事件は當時可成世間の話題に上つたのと、後日彼が『お化を見た話』と云ふ一篇を雑誌『改造』へ發表し、神近が之に抗議したりして更に記憶を新にした、餘り世間に知られて居ないことは、此事件が突發する前月、彼と神近と野枝とが連名で、戀の三角關係を雑誌『女の世界』に掲載した、随分露骨な性慾なごのこまで書き立てたので、その月の雑誌は發賣を禁じられた。

大杉の此事件に對しては、新聞の誤報も原因して、一般世間は勿論、同志の間でさへ非難する人が多かつた福田や浪人が彼を辯護もし、援助もしたので、彼も之を厚意に感じて居たものか、あの喧嘩好の男と、死ぬまで一度も氣まづい思をするやうなことはなかつた、評判が悪くなつた爲め原稿は賣れず、近藤憲二や福田大將を狙撃した和田久太郎等と雑誌を出したこともあるが、二三號で廢刊した。

何でも秋近い雨の降る寒い日、洗ひざらしの單衣を着た野枝が、服部の所へ行つた歸りだと云つて、赤坊のマコちゃんを抱いて、覆き減らしたウスい下駄で、ヌカルミの中をベチャ／＼と山勘横丁の梯子段の下のウス暗い浪人の事務所へやつて來た。その時大杉は尾行を殴つた事件で入獄して居たので、差入の金が入用だつたのだが、浪人も貧乏して居たので、大枚三圓しか出すことが出來なかつた、今でも想ひ出すとイヤな氣持がする。

彼は出獄してから魔子を抱いて例の事務所へやつて來た、何分凄いのが虹の如き氣焰を上げて居たので、驚いたものか子供が泣き出したら、

『よし／＼恐いオヂさんが居るからナ』と云ひながら外へ出た。居合せた猛者連、

『どつちが恐いオヂさんだ、あれでも自分のオヤヂだと思ふと恐くないのかな』

と大笑ひしたことがある。

◇糞の米騒動

大正七年の春から騰貴し始めた米價は、夏の暑い眞最中には、五十錢臺を突破して、所謂殺人相場を現はした、時の寺内内閣は百方力を盡して調節したが經濟に根本の誤りのある現在の制度では、無駄な骨折であつたアレヨ〜と言ふ間に米はドン〜上つた。

その頃京橋の日吉組に車引をして居た岩崎は、突然浪人の事務所へ來て。

『俺は女房の債券を質に入れて、米價値下の演説會をするから、出席してくれ』と云ふ、何しろ世界大戰の餘波を受けて、日本やアメリカでは黄金の雨が降つてゐる時だから、

『こんな景氣のいゝ時に、米が五十錢位したつて、世間の人は餘り問題にして居ないだらう』と答へた。

『それだから不可ん、まあ、長屋の井戸端へ行つて、神さん連の話を聞いて見たまへ、景氣の恩恵を受けて居るものは、少數の成金だけだ』

浪人も此一言を聞いてギョツとした、社會運動者だと云つた所で、學者の著書を少し讀んだ位で、貧民窟へさへ減多に行つたことはない『俺は遅れたなア』と思つたその時、岩崎がグツとにらんだので、思はず顔をそむけた。

演説會は米穀取引所際の相互俱樂部と決まり、辯士としては布施と山崎と浪人が出ることになつたが、當日になつて警察が妨害したので止むを得ず中止した、これでカンシヤク玉を破裂させた岩崎は、時の農商務大臣仲小路廉に面會を求めたが逢はない、彼は用意した罐詰のクソを、應接所のテーブルの上へタ、

キつけ、プロレタリアの黄金の雨を降らしたので大騒となり、岩崎は廿日の拘留に處せられ、その時取次をした守衛まで首になつたのは氣の毒であつた。

それから間もなく起つた米騒動の巻添で二年の刑を受けた浪人は、出獄後身體が衰弱して居たので、友人に推められ生れて始めて二等車に乗つた、窓の外を一心に眺めて居た子供が、驛夫が『なかの』と呼んだので思ひ出したものかだしぬけに、『お父さんは、この監獄に居たんだネ』とやつたが、平常母親から云はれて居ることを思ひ出し、

『別荘だネ』と訂正したが、もう間に合はぬ、乗合せた人々が、あつちでもこつちでもクス／＼やり出したので、折角貴婦人氣取りですまして居た浪人の山の神が、テレたのは滑稽であつた。

何の運動でも必ず、縁の下の力持がある、社會運動にも矢張りそれがあつた

一人は野澤重吉、他の一人は渡邊政太郎である、野澤は車夫をしながら主として労働者に社會主義を宣傳し、渡邊は飽賣をしながら智識階級に無産者の悲惨を叫んだ、二人共有名にもならず、うまい物一つ喰はず、野澤は芝の慈惠病院で渡邊は小石川の自宅で、貧乏と迫害の中に斃れた。野澤は愈々駄目と決まり別室へ移されることも知らず、

『退院したら一運動やらなけりや』と云つて居たし、渡邊は、

『此まゝ死んだんぢや、死にきれぬ』と云つて居た。

◇未だ死せず

足尾銅山騒擾事件の首魁者としては、南助松永岡鶴藏の二勇將がある、南は策士肌の男で演説中どうしても抗夫が動かないので、赤インキを口からダラ／＼

とたらししたので、今迄で感じないやうな顔をして居た坑夫は『辯士は血を吐いた』と眞青になつたと言ふ、永岡は出獄後片山の所に寄食して居たが、獄中作の『一つとや、人に知られた足尾の山に、人の知らない生地獄』と云ふ歌をバンプレットとして發行し、大きな旗に『永岡鶴藏未だ死せず』と大書して、夜店や縁日で例の一つとやを賣つて居たが、その後よからぬ女の爲に獄に下り、程なく牢死した。

これも同じ足尾銅山で罷業事件の突發した時、高野松太郎外二十四人の坑夫が騷擾、強盜、脅かつ、電信法違反、業務妨害と云ふ恐ろしい罪名のもとに收監されたことがある。

事件の内容は極單純だ、坑夫が鑛主古河に向つて労働條件改善の要求をした。古河は肯かなかつた。そこで坑夫が大勢一團となつて事務所を押掛けて否應な

しに承諾せしめ、且相手から承諾した旨の覚え書をとつた。一方では、一團の坑夫が飯場に行つて重役に辭職を承諾せしめ、且その旨の覚え書を書かしてうけとつた。猶この時、變電所のスイッチを切つたものがあつた。それがために一部の電話が不通となり、且坑内の作業に故障を來した（と古河や検事が云つて居る）

これが事件の全部だ。調書に依ると、大勢でワイ／＼騒いだから騷擾罪、鑛主から覚え書を無理矢理に取つたから強盜罪なのださうだ。覚え書の紙一枚でも、財物を強奪すれば立派な強盜だと云ふのだ、頭役の方のは、たゞ覚え書の紙一枚を交付せしめたので強盜とまでは行かずに恐かつ。それから電話を不通にしたのは電信法違反、坑内の作業に故障を來さしめたのは業務妨害罪に當つた譯だ。

これは後で知つたことだが、強盗の理由になつた財物（覚え書即ち紙一枚）は古河が出したのではなく、實は一坑夫の鼻紙だつたと云ふことだ。覚え書を書くと鑛主に迫つた時、紙がないと云つたので、一人の坑夫が懐から鼻紙を一枚出してそれに書かせた。だから二十四人の強盗犯人を出した所以の財物は鼻紙一枚であつたのだ。然もその財物は實は被告人の財物であつたのだ。

騷擾強盜脅喝などと云へば、定めし大勢して金持ちを縛り上げて金庫でも引つ張り出したやうに人は考へるであらうが、事實は斯うした事件なのだ。これはうそでも作りごとでもない。この事件を擔當した検事は途中ではつて二人あつたが、二人とも榮轉してゐる、若林辯護士や小作人を窃盜罪で告發した高松検事局の検事も、今に何處かの検事正に榮轉するだらう。

◇尾行旅館

明治維新の際に薩長の浪人等が京都の寺田屋を根據地として倒幕を謀議したやうに、資本制度を打倒することを使命とする主義者連が大阪の永田館に集つた、女將の永田よしは五十餘りの小肥りした女である、堺でも、大杉でも、山川でも、山崎でも、主義者と云はれる程の者で此宿に泊らぬ者はないと云つてもいい、尾行の三人も連れて歩くやうな猛者共が、此女將の前へ出ると『お母さんく』と小さくなつて居るから不思議だ、おしいことには市區改制の爲め有名な『尾行旅館』が取拂ひになつた。米騒動の時此宿屋へ判検事が出張して假豫審を開いたことがある、それは此事件で拘引された藤田、水谷、金咲、神崎等が宿つて居たと云ふので、女將から女中から料理番まで訊問され、上を下への

大騒ぎをした、今でも女將がその時の話が出るよ、

『わたしもあの時はヒドイ目にあひましたよつて、あんた等の目的が達しましたら、金閣寺の横へ別荘でも建て、貰はんならん』とまる／＼と太つた體をゆすぶりながら笑ふ。

此事件の時、藤田が神戸で拘引されたこと云ふことを聞いた水谷は、これは自分もやられると速断し、當時彼の近くに居た江川に『浪人が神戸でやられた、どうせ俺の所へも飛火するだらう、後は萬事よろしくたのむ』と云ふ置手紙である、案の通りその日家宅搜索に來た検事に、證據物件として例の手紙を押收され、豫審廷へ水谷を呼出した時、

『その方は騒擾に關係はないと云ふが、藤田が神戸で拘引されたと聞いて、自分も檢舉されるものと覺悟し、友人に置手紙をして居るぢやないか』とサン／＼

油を絞られたものだ、後になつて考へれば水谷も變な手紙を書いたものとおかしくもなるが、犯罪の有無を問はず何か問題があれば、必ずやられるものと先入主になつて居る主義者達には、こうした錯覺が何時の事件にもあるのだ。

當時一番年下であつた金咲は『君のやうな前途有望の青年が僅かな刑罰を免ぬかれんが爲め、卑怯なことを云つてはならぬ、他日出獄してから同志に顔向がならぬではないか』と検事にオダてられ、

『吾々社會主義者は米騒動のやうな時を利用して、〇〇をやるのは……』なんて吹き立てたのは——後から豫審調書を見てヒヤリとした、大逆事件の多くの人は此誘道訊問に乗せられたやうだ。

◇馬上の雄姿

多少のゴタ／＼はあつたが、札附の政府が提出し、頑迷の標本、長袖連までが賛成して、兎にも角にも兩院を通過した普選も、且ては社會主義運動の豫備行動として、危険視せられ、『各人出頭して議會へ請願すべし』と云ふ廣告をしたゞけで、發起人の福田や浪人が檢束され、これを見舞に來た岩崎や渡邊まで警視廳に二晩も宿められたことがある。

普選が衆議院を通過したのは今度が始めては、西園寺内閣當時、貴族院は否決したが衆議院だけ通過したことがある。その頃麴町の富士見軒で祝賀會を開いた時、四百足らずの代議士に意見を求めたら、鷄軍の一鶴と云はれた尾崎でさえ、選舉權擴張には賛成だが、普選には賛成相成らぬと言つて來るし犬養は全然反對して來た。その時の返事のはがきが他日の參考にもと大切に保存してあつたが、震災の時書籍と共に焼失して仕舞つた。今寫眞版にして新聞

か雑誌に掲載したら彼等はドンナ顔をするだらう。

拾何年か前のことだが神田の青年會館で、中村太八郎や大井憲太郎、片山潜等が發起人となつて普選の演說會をやつたことがある、麒麟も老いては驚馬に如かず、大阪事件當時の馬城將軍も、野次馬の前では一兵卒の價値もなく、もろくもヤチリ落された。その後へビク／＼もので出た浪人が、意外な上出來（その頃長髪にして居た爲か）、大向から『演說の雲右衛門』と云ふ半疊まで入れられた。それもその筈だ、當時は會社の看板を逆にして置いても秩序紊亂になる時代だから、普通選舉の演說の中へ巧に社會主義の學說を織り交せ、日本中八回も遊說して、浪花節の義士傳のやうに空讀が出来るやうになつて居たのをましくしてたから、モテたのは當然だ。あれが始めての材料であつたなら馬城同様葬られたにちがいない。

幾多の志士の血に依つて得られた普選にも、なまめかしいエピソードがある、日本に於て初めて行はれた普選の示威行列の陣頭に立つて、馬上殿めしく群衆を指揮した一人に、軍閥に弓を引いて首になつた陸軍騎兵大尉西本國之輔がある、彼の雄姿を一目見るなり。心臓の鼓動を高鳴らした一女性（元音楽學校の女教師）は、單刀直入的に結婚を申込んで来た、當時西本は夫人を失つた際だったので、話が直にまごまり同棲することになつたが、一方は藝術家肌の感情家であり、他方は軍隊式の一本調子と來て居るから、一寸とした口説にも花が咲き、寢物語も喧嘩の種となり、歡樂極まりて悲哀多し、彼女は遂に西本の家を去つたが、二人の戀の記念は一つの生命となつて、今でも彼の家に伸て居る。

恐 怖 時 代 Ⅱ 第五編 Ⅱ

◇官憲の迫害

官憲が社會運動者を迫害することは世界各國共通だが、中にも大和魂の日本國は又格別である、震災當時大杉や平澤等を絞殺又は銃殺したのは露骨な方だが、人目に立たぬやうに眞綿に首式に蔭劍にやられることがある、山口義三の姉が或軍人と結婚して居たのを軍閥が干涉して、弟が社會主義者であると云ふ理由で生木を裂くやうな離婚をさせたり、刑事が會社や商店へ行つて社會主義者の發行して居る新聞や雑誌に廣告を出してはならんとか、雇つてはいかんどか云つて妨害する、他の新聞や雑誌に掲載されて検閲済になつて居る記事が社會

主義者の雑誌や新聞に轉載されると告發されたりした、現に洋二(藤田)や神崎が中央公論の記事を轉載して二百圓も罰金を取られたことがある、南都の赤帽子で通つて居た吉村俊作が、自分が關係して居た新聞で、盛に自由廢業を書き立たので、樓主が警察と協力して奈良から追ひ出した、こんなことを一々數へあげたら限りはないが、最も甚しい實例としては、浪人が大正四年の總選舉の際、當時の大隈首相や大浦内相が選舉干渉をして、民衆を壓迫したのは、許すべからざる大罪であるから、社會的制裁法に依つて無期徒刑に處すのは當然である云ふ號外を出したら、欺偽で告發し、米騒動の時、神戸の勝田汽船會社でロシア革命や鈴木商店の焼打の話をしたのは、恐喝であると云つて拘引した、大杉が家賃が滞り米屋に借金が出來たといふので横領や欺偽で取調られたことがあり、吉田が十燭の電燈を點火したのは窃盜であると云つて牢屋へブチこん

だりした、現在の法律や道徳に對して根本的に見解を異にして居る主義者に取つては、サギであらうが、カラスであらうが問題でないが、盲千人の世間を利用し、なるべく悪い罪名をつけて、社會的信用を失はしめやうとする、その手段は如何にも惡辣を極めて居る。

◇獄中の挨拶

大正八年の末、米騒動の卷添で浪人が入獄した時には、それから一年半も前に當時の警視廳官房主事大島某と喧嘩して不敬罪となり、三年の刑を受けて福田狂二が入獄して居た、互に一年の餘も會はずに居た所だから、場所が場所だけに一言なりとも話がしたくて堪らず、色々苦心したが、機會がなかつた、折も折も正月の二日入浴の時、偶然にも浴場で二人が落ち合つた、幸ひ二人入

り風呂があつたので、看手の目を盗んで飛び込み、一別以來の話が盡きなかつた、入獄前福田と浪人との間にツマラヌ事から感情の行違があつて、互に面白く思つて居なかつたが、福田の入獄と同時に辯護士の周旋や差入の爲め自然に感情は直つて居た。

『君と俺との境遇は、不思議によく似て居るナ』と云つたら

『二人は一しやう離られやせないヨ』とニコ／＼と笑つて居た。筆者は此時ホントの福田を見たやうな氣がした、彼は直情經行な男だから、何か癢に觸ることがあると、國際間の宣戦布告見たやうな文章で、『今後交りを絶つ』と絶交状を送つて來たりするが、根が善人だけに感情が解けると却々いゝ所がある。

二人が話をしたことが知れて以來、入浴にも教會にも一しよに出さなかつた、所がそれから二三ヶ月してから、受持の看守が交代した時知らずに二人を

又一しよに出した、待ちかまえて居た福田と浪人は、又々同じ風呂へ飛び込み今度は中から反對に鍵をかけた、之が普通の囚人なら嚴罰に處せられるのだが、治外法權の連中では手がつけられず、結局係の部長がやつて來て、

『私がかまはぬが、之が典獄に知れると、受持の役人が免職になるから』と云ふ情を含んだ話であつたので、二人は鍵をはづして外へ出た。

當時の豊多摩監獄は多士齊々であつた、東監には大杉榮と福田狂二が居るし、西監には野依秀一と藤田浪人が居た、談話を禁じられて居る獄中では、囚人同志の挨拶は咳拂である、大杉や福田が運動に出ると、浪人の監房の窓の前で、

『エヘン、エヘン』と咳をする、之があいづだ、窓から顔を出すと先方は畑の道を歩きながら、互に顔を見合せてニッコリする、此ニッコリが獄中では何物

にも例へ難い慰安なのだ、何時だつたか野依の監房の前を通つた時、『エヘン』と例の挨拶をすると、恰度晝飯時であつたので、口一ぱいにはうばつた四分六飯の爲に、にはかに返事は出来ず、眼を白黒しながら、嚙まずに呑込み、『エヘン、エヘン』と答禮したのには、生れてから笑つたことがないと云つたやうな、顔をして居た獄卒殿もブツと吹き出した。

◇法廷でスツパダカ

検事の辯論中起立せないと云ふ事件は、先に大杉や荒畑も再三問題を起したことはあるが、大正十一年の夏、吉田、長山、平岩、石黒等と赤化防止團の米村某の自宅に押し込んで射殺された高尾平兵衛は、『クロボトキンの社會思想研究』及『法律と強權』の二文書を、秘密に出版して起訴され、東京地方裁判所

で公判となり、裁判長は型の如く、被告高尾に起立を命ずると彼は偉丈高になつて、

『由來法廷は昔から白州と呼ばれて、恐怖の的になつて居る場所であるが、何しろ崖のやうな所から瞰下されては壓迫を感じる、裁判所は慣習に依つて起立を命ずるのであらうが、俺は慣習や因習の命令に服従する義務を持たない、況んや検事は被告の敵ぢやないか』と斷乎として起立を拒んだ、すると裁判長は『慣習を無視するなら、裸で出廷しても好いぢやないか』と云ひ終らぬ中に、

『よろしい、ぢや裸にならう』

と云ふより早く兩肌を脱ぎ捨て、此状を見た傍聽席の同志は、

『ヤレ／＼しつかりやれ』とケンかけると云ふ始末で手のつけやうがない、逆

てももの事に、被告及傍聴者に退場を命ずると、一同は法廷の入口に採み合ひ乍ら革命歌を高唱し、警戒の巡査と格闘する程の騒ぎが起り、餘儀なく判決言渡を延期した。

是が動機となつて、被告起立問題は一時法曹界の大問題となり、『判決例に待つか、法律の改正に依るか』の論議は闘はされ、今に解決を見ない様であるが、爾來これが導火線となつて、判事の命に抗して起立を肯せず、世間を驚ろかした事件は屢々くり返へされるやうになつた。

その一例は、活版工組合の機關誌『正進』が過激な論文を掲載して、活版職工を煽動したと云ふ諏訪の筆禍事件で、先に問題を起した高尾が、

『起つな』と諏訪に聲援して、兩人とも法廷外に曳き出され、續いて鑛山労働組合の機關紙『労働社界』に『俺達の捨場』と題する過激な記事を連載したと

云ふ、山本の筆禍事件で

『俺は山本だが、警官とぐるになつてる検事に敬意を表する必要はないから、起つのはいやだ』と頑張り、廷外に拉し出されたことがあつた。

◇偉大なる低能兒

その頃、單に被告のみならず、裁判官と辯護士との間にも奇抜な事件が起り、某辯護士は、『石ころや小僧判事や秋の風』と駄句つて、懲戒裁判問題が起り、山崎今朝彌は、廣島縣吳市で發行する民権新聞に掲載した『死かパンか』と題する記事が、當局の忌諱に觸れ、秩序を紊亂したと云ふので、第一、二審共有罪となり、罰金四十圓に處せられたのを、上告した趣意書に

『之れをしも強ひて秩序紊亂と云ひ得べくんば、日頃、日常の新聞雑誌は秩序

紊亂となり、それを不問に附する全國の司法官は、悉く偉大なる低能兒の化石なりと言はざる可らず、天下斷じて豈斯の如き理あらんや』

この文字があつた爲め、懲戒裁判に附せられることになつたら

『小生は和氣霽々裡に厳しく懲戒され、電光石火寢耳に水で世間をアツと言はせるのを唯一の楽しみに、從來堅く秘密を嚴守の所、今回圖らずも、事、検事局に洩るゝ所となり、今は却つて迷惑と感じ候次第……』

と端書に印刷して各方面に出し、最後に

『僭越ながら茲に拙著（懲戒になる迄）を一部御購讀被下度候』と附記してある、蓋し轉んでも只起きないのは、當代大流行の風潮とは申しながら、筆禍を種の商賣はこれが嚆矢であらう、而して山崎は第一審の判決に服せずして控訴したが、遂に控訴院で停職四ヶ月の判決を受けた、彼は相變らずの調子で

『お蔭で、休暇五ヶ月の恩命を被つたが、人物拂底の今日、悠々閑々たるは却つて恩旨にも背くから、社會奉仕的道樂の意味で、熱心激烈に、悪家主悪差配征伐、貧乏人の爲め家主、富豪、悪會社、悪官吏の問責、違警罪即決例及行政執行法廢止の期成等の實行、相談に預りますから貴下の筆から口から、費用のかゝらぬ方法で世間に吹聴し、遂に私をして忙殺するか、降參閉口させるやう、御盡力を、暑中伺ひに代へて御願します』

と披露状を出した。

◇戀愛合戦

堺は獄中から妻君に宛た手紙の中に、

『僕は平生、自分は弱點や過ちを人前に隠すやうな事はせぬと思つて居た、所

が、ルソーの自傳を読んで見て恥しくなつた、ルソーは實に大膽卒直に在の儘を白狀して居る、随分不道德な怪しからぬと思はれる様な事を少しも包まずに書いて居る、而も人がそれを讀んで、ルソーを輕蔑せざるのみか、却つて深く同情を寄せるのは何故であるかと思ふ、實は誰でもルソーの爲して居る位な惡事をして居るからだ、そして大底の人は其惡事を包み隠して居るが、ルソー自傳の如き思ひ切つた懺悔を聞いて見ると、忽ち深く我身の偽善修飾を恥づると、同時に、其懺悔者の大膽卒直に對して、大いなる敬愛の情を生ずるのである、然し世間には、随分此本を讀んでルソーは品性の下劣な奴だなどと評する、慢性偽善病の君子がある、かゝるが故に僕は善人君子が嫌だ」と云つて居る。社會主義者の中にも、チヨツと女の話でもすると、すぐ『あいつは不眞面目だ』と云ふものがある、で當人は眞面目かと思へば、口に出して云はぬだけで、

實は口外する者よりも不道德なことをやつて居る人間が多い、勿論イクラ露骨がいゝと云つても往來でクソをされては困るが、他人に迷惑をかけぬ程度に於いて、多少野性を發揮するのも人間味があつていゝではないか。

片山が遊説に行つた時、浪人や鈴木と眞晝間松坂の女郎屋を片ぱしから、ひやかしたことがあり、堺が自分の子供見たやうな洋二(藤田)や神崎を連れて、バーへ押し込んで女給をからかうなどは、そこに革命家としての若々しさもあり、一世に反抗して主張を貫く根強さもあると思ふ。

鈴木商店の長春の支店に居た藤岡淳吉が

『俺はこれから社會運動を始めて、鈴木の跡にペン／＼草を生してやる』と云ふやうな宣傳ビラを印刷し、全國の支店や社員に配布して飛出して來た。信玄に鹽を送つた謙信を眞似た譯でもあるまいが、此反逆者に永い間仕送りをして

居た金子直吉にも面白い所がある。彼は出京後間もなく堺の所へ居候をするこ
とになつたが、當時あたかも一人娘眞柄嬢を中心として、藤岡、川崎、高瀬、
浦田等の若い革命家達の戀愛合戦が宣告され、まんぢ巴と切り結んでゐたが、
他の連中は戦利あらず、中元の鹿は高瀬に射留られた。尙眞柄と親子程ちがふ
石川三四郎や、自稱天才島田清次郎との間にも、お安からの風説は立つたが、
新聞に材料を供給したゞけのことで、事實は何の事もなかつたらしい。

モ一つは浅井里香を中心として洋二(藤田)、北原の戀の三角關係である、此
事件の中心人物が筆者と關係が深いだけに、一寸困つたが、女のピストル自殺
に依つて、長い間の難問題も、一發の銃聲と共に幕を閉ぢた。外に福田狂二と
本莊幽蘭、田口運藏と待合の女將、小生夢坊の重婚問題、近藤、高津、中西等
面白い戀物語もあるが、他日に譲る。

◇極端なコントラスト

社會主義者には面白い對照がある、親子の主義者では、堺親子を始め、大阪
の逸見親子、夫婦では死んだ大杉夫妻、山川夫婦や中曾根夫婦があり、兄弟で
は藤田兄弟、神崎兄弟、兄は死んだが安成兄弟がある、極端な例としては、大
逆事件の時死刑になつた奥宮健之は、兄は當時宮城控訴院の檢事正をして居た、
奥宮は自由黨の運動をして居た頃運動費を造るべく愛知縣の豪農の家を襲ひ、
歸途警官と衝突して斬殺し、強盜殺人罪として死刑の判決を受けたが、憲法發
布の時宥されて出獄したのである、一生の内に二度も死刑に處せられたのは、
恐らく此男位のものであらう。

もう一つ面白いコントラストがある、何時も名がよく似て居るので鐘紡の武

藤山治と間違られる、金貸の武藤三治は、關東の三羽鳥と言はれた程のアイヌだが、反動的に來たものか息子の重太郎は、猛烈な危険思想者である、時々息子が

『お父さんも、何時までも、こんな人に憎まれるやうな商賣をして居らず、他にイクラも仕事があるのだから、その方へ商賣變をしたらどうです』とそれとなく意見をすると

『お前は何時も、人に憎まれるとか、不當な利益だとか言ふが、今の世の中で生活して行くのに、人に憎まれぬ仕事や、不當な利益でない商賣があるか、一寸會社へ名前を貸して不當な賞與金や配當を受けて居る重役もあるし、土地や資本を獨占して、貧乏人や労働者から怨まれて居る者もあるぢやないか』

『それだから、吾々の言ふ通りに、制度の改造をしなければならんです、罪

は社會にあつて個人にない、組織が改まれば悪いことなどする者が、自然に無くなつて來ます』

『わしは正直なのだ、他の奴等はコソ／＼目立ぬやうにやるのを、わしは露骨にやるから目立つのぢや、不當な利益を得て居るのはわしばかりぢやない』

こうした會話が、親子の晩酌の話題となり、酔の廻るに連れ議論も高じ、家族のもの迄ハラ／＼さしたものだ、負ふた子に教へられて淺瀬を渡る、是までの商賣を止め、社會事業に貢献するぞうだ。

◇赤旗の國へ

大正十二年の春まだ淺い三月中旬、中田と浪人とは、社會運動の資金を造るべく、目下在露中の片山を通じてレーニンに面談し、沿海洲の山林及漁業を獲んと赤旗の國ロシアへ行く計畫を立てた、これと前後して吉田、荒畑な

ども入露したが、至る所官憲の眼が光つて居るので野を越え、山を越えと言つたやうな苦勞をしたものだ。

東京から長春までの切符を買ひ、下關へ急行した。朝鮮行の汽船と門司行の連絡船とを間違ひ、出發間際に乗換へたまでは無事だったが、船が門司港を離れた頃、甲板へ出やうとすると、階段の中程に詰頸の男が腰かけて居る、此男の顔を見た時

『しまつた！』と聲には出さぬが、互の心を打つものがある、『こんなに要心して来たのに、どこで見付かつたんだらう』と考へて見る、色々相談したが船の中では何とも仕方がない、スバイだからとて人間である以上、海へ投げ込む譯にも行かず、まゝよ行ける所まで行け、つかまればつかまつた時のことだと腹をキメた。

夕方釜山へついて満鐵に乗りかへた。汽車は京城へ向つて走つて居る。なる程朝鮮の山には木はない、満山悉く禿山だ。永い間不規則な政治の下に壓迫された彼等には、貯蓄心がない。その日暮した。山の木でも片ぱしから切倒して殖林をやらぬ。切る木が無くなると今度は根を掘る。それだから雨が降ると、畑と云はず、田と言はず、土砂が押流され、忽ち盲目曠寥の原野となるのだ。汽車の中で夜が明けたり暮れたりする、何日乗つたら目的地へ着くことか、イクラ行つても山もなければ川もない茫々たる枯野原、『ロシアは北國果て知れず』の歌にふさはしい。支那人やロシア人に何處か大陸的なノンビリした所のあるのも此の爲だ。セ、コマしいと云ふ以外に何の取柄もない盆栽見たやうな小ぼけな日本と云ふ島國に、ロクな人間の生れないのも最もだと思つた。讀書に飽いたので窓を開けると、今地平線を離れたばかりの月が、悪魔の眼

玉の如くニラんで居る、滿洲の月は亦格別だ。日露戦争の頃流行した、『離れて遠く滿洲の、友は野末の露と消え』と云ふ悲哀な歌を思ひ出す、ブル共の利益と野心の爲め、幾百萬の兄弟の骨が此野原に晒されて居るのだと思ふと、晃々たる月下を、數知れぬ骸骨が、形相さまざまに列を造つて押寄せて来るやうな氣がする。

奉天へ着いた時、乗り込んで来た日本人に、氣になるから行先きを聞いたたら、『長春から先のことには判りません、汽車の時間も決つて居らず、馬賊もチヨイチヨイ出るそうだし、日本人は餘り居ないそうです』と云ふ、二人が顔見合せで『愈々笠の臺がなくなるかなア』と苦笑しながら首を撫で、見た。

旅中珍らしく思つたことは鳥の巢の多いこと、汚ないと思つたのは朝鮮人の家、悲惨に思つたのは長春の郊外に、棄て、ある乞食の死骸だ。着るに衣なく

住むに家のない彼等は、零點以下何度と云ふ嚴寒中に凍死するんだそうだが、その死骸の横腹を豚が喰ひ破つて腸を引づり出した慘狀は、どんな冷酷な人間でも、二目と見られぬ光影だ。

話程のこともないがハルピンの市街は、武装した支那兵で警戒されて居る、何分治外法權の所だけに何となく秩序が亂れて居る。奇抜なのは芝居が、夜中の十二時頃から始つて夜明までやる、然も鏡の上の裸をどりと來て居るから堪らない。馬賊が來ると云ふので夕方になると皆戸を締めるから、市中は眞暗だ。其月の某日二人はマンチウリヤに向つて出發した。何處まで行つたか誰にあつたかは、當分都合の悪いことがあるから、讀者の想像にまかす。これは内しやうだが、中田が長春の魔窟を探検したいと言ふので、支那人の車夫に案内を頼んだが、日本語さえ満足に出來ぬ彼とは話が通せず、小指を出して見せたら

指環でも買ふと思つたのか、時計屋へ連れ行かれたのには閉口したようだ。

◇茲を突け!!

九月一日の大震災は、人類史上稀に見る悲惨事であつた、家屋倒壊の爲めの
歴死者、火災の爲めの焼死者、自警團や官憲の爲め虐殺された鮮人と主義者、
故意又は悪意の流言蜚語、それ等の誤解より起る悲喜劇、一々記すのさえ頭が
痛くなる。

その前年獨逸に開かれた無政府主義の大會へ出席すべく、巧に警戒網を潜つ
て、日本を脱出し、海外に放浪すること半歳、翌年の夏亡命の旅より歸つた大
杉は、當時湘南に住居する弟妹の身の上を案じ、彼の愛妻野枝と共に見舞に出
掛け、市外柏木の自宅に歸らんとした處へ、甘粕大尉と森曹長が來て、

『隊長か、あなたに一寸と御目にかゝりたいと言つて居りますから來て下さ
い』と言ふ、彼は何心なく、

『それちや行かう』と野枝と甥の橘宗一と三人自動車に同乗して、麴町の憲兵
隊本部へ來た、案内されたのは、二階の應接間である、電燈のつかぬうす暗い
室で、森と雑談して居ると、反對の方のドアを音もなく開けて這入つて來た甘
粕は、物をも言はず、いきなり柔道の絞手で、大杉の喉咽を絞め上げた、彼も
その道に心得のある者、そうたやすくやられるのではないが、相手の甘粕は、
大杉の腰掛けて居た椅子のもたれ木に、足をかけて居たので力が増加し、どう
することも出來ず、三十九年の劇的生涯の幕は閉ぢられた、何の抵抗力もない
婦人の野枝も當年七才の無邪氣な少年宗一も同一の手段で絞め殺された。大逆
事件の時大杉は『春三月、くびり残され花に舞ふ』と駄句つたが彼も同じ運命

の下に斃れた、當時龜戸警察では、どう血迷つたものか、善悪正邪の區別もせず七百餘人を檢束して演武場へ押し込んだ、暑くはあり腹は減る、昂奮した檢束者は関の聲を上げて騒いだ。之に面喰つた署長は、警戒に来て居た兵隊に引渡して、その大半を銃殺した。一兵士から銃剣を突き付けられた平澤は、『茲を突け！』とそり身になり、胸をたゝいて見せたと言ふ、膽そのものゝ如き彼としては、ありそうなことだ。

◇亡命の旅へ

恰度その頃『東京日日』の記者が来て『大杉さんが殺されたと言ふ話があるが、貴殿の所へ何にも知らせはありませんか？』と云ふ。

『地震以來交通遮断になつて居る譯ですから何の通知もありません。この間弟が来たので大體の消息を知つたゞけです』

『尤も風説ですから、確なことは判りませんが、最初は堺さんだと云ふ話でしたが、現に共産黨事件で入獄して居られるのだから、それは嘘だらうと云つて居た位です。』

『堺さんの方は嘘でせうか、大杉君の方はありそうな風説ですからネ、現に私なども何とか云つて居るものが、此町にもあるそうです。追々番が廻つて來ますかナ、ハ、ハ、』と二人で笑つた午後警察の高等課から來て『悪い評判が立つて居る。若し間違ひでもあると困るから何處かへ暫時隠れたら如何です』と注告に來てくれた。鮮人の襲撃とか、主義者の煽動とか云ふ流言蜚語を信じて、馬鹿騒ぎをした在郷軍人とか青年會とか云ふものを見て西洋の或社會運動家が『貧乏人とか勞働者とか云ふ者は無智である爲め、自分の味方や仲間を敵視するあんな者に同情するよりもブル共と一しよになつてイヂメてやつた方が却

つて早く目が醒める』と云つた嘆聲を思ひ出した。實際自警團とか云ふ連中のやり方を見ると民衆より巡查や兵隊の方が餘程進んで居る。『俺も愈々殺されるかな』と考へて見る、一體今迄命のあつたのは不思議なんだ、本當なら大逆事件か米騒動の時此首が飛んで居た譯だ、ブル共の的に取られるやうになれば俺も存外大人物になつて居るのかも知れぬ。高樹風多しだ、ツマラヌ奴と喧嘩するか地震の爲に死んだのでは、ホントの犬死だが、主義とか思想とか云ふもの、立場からなら、北國の土百姓の件に取つては過分の光榮だ。然し無暗に命の安賣をする事もないから、家族に云ひ含め變装して某日の某夜、西へ向へて落ち延びた。

◇大事の前の小事

一軒の家でも全盛時代は大底のことは圓満に運ぶが、少し家産が傾きかけると、親子喧嘩、兄弟喧嘩の絶間がないやうに、社會運動や労働運動も、反動期に這入るといつも仲間喧嘩が始る、第一期時代にもそれがあつた、最初は幸徳堺對片山西川の分裂で、裏面は兎も角、表面は主義の相違となつて居たから、餘りボロも出さなかつたか、次に片山と西川の分裂した時は經濟問題に感情がからまり、仕舞には随分まづいものになつた、當時筆者は廿歳未滿の小僧であつたから、深く立ち入らなかつた、が中には聞くに堪へぬやうな惡聲を放つ者さへあつた。

永い反動期に苦しめられた、社會運動も大正七年の米騒動以來、再び盛り返して來たので、一時は右傾から左傾まで一望千里、打つて一丸となり社會主義同盟などと云ふ大同團結まで出來たが、震災以來反動期に這入つてから、僅か

な感情の行違が原因となつて、分裂又分裂で際限がない、最近の總同盟の分裂などは、最も嘆すべきものゝ一つだ。

社會運動は精神運動に對抗して生れたもので、前者は社會を改造して個人に及ばそうと言ふのであり、後者は個人を善化して社會に及ばそうと言ふのである、若し一つの團體若くは組合が、醜惡なる資本主義の外に超然として、聖人君子の集りのやうな理想的なものが出来る位なら、ブルードンやフェリーのユトピアも實現される譯であり、ロシアの新經濟政策もいらぬ譯ではないか、従つて社會運動の必要もなく、精神的に社會國家を救ふと云ふ、道學者や宗教家に一任して置けばいゝのだ。

と云つて私はスパイや裏切者を歓迎する譯ではないが、内部の革正と云つても程度がある、病を快す薬も度を越ゆれば却つて害になるのだ、人間はその面

の異ふやうに、各々性質も異ふ、五人や十人ならケツベキも通るが、大衆と共に天下の偉業をやる時には、總てに對して寛大でなければならぬ、同じ陣營に立つ者と争ふことは敵に乗せられる恐れがあり、運動の精力を分散させる憂があから、如何なる意味に於ても、戦術の上から見ても、ことではない。大事の前の小事だ、楊子で重箱の角をホジクルやうなケチなことは慎まねばならぬ。思想の争はいゝ、それが爲め共同戦線に立つことを拒むに至つては、社會運動將來の爲め悲まざるを得ない。

大正十四年六月十日印刷
大正十四年六月十五日發行

定價五十錢

印刷所 東京市京橋區木挽町一ノ十一
東京印刷社

發行兼編輯印刷人 東京市外大井一本松二二四八
藤田與次

發行所 東京大井一本松潮流社
問題社出版部
振替東京七〇七九七番

藤田浪人編

社會問題大觀

(定價五圓) 問題社出版部

藤田浪人作

創作 五月一日

(定價一圓) 問題社出版部

藤田浪人著

民衆に與ふ

(定價廿錢) 問題社出版部

◇每月一回一日發行◇

赤い雜誌 問題 十一錢部

東京大井一本松
問題社出版部

◇ 史化進會社 ◇

藤田浪人氏著

(近刊豫告)

(一)序言。(二)地球の起原。(三)人類の發生。(四)原始生活。(五)封建時代。(六)資本制度。(七)結論の七章五十八節に分ち、明快な論旨と趣味多き實例を以つて社會問題を斷じたるもの、複雑なる人間生活史を一貫したる全體系に纏たる所は、前例なき著者の獨創である。

問題社出版部

終



3
02

社題問